『談話のポライトネス』
第７回　国立国語研究所国際シンポジウム　国立国語研究所　2001年
pp.9-58

発表１

談話のポライトネス

―ポライトネスの談話理論構想[1)]―

宇佐美まゆみ
東京外国語大学
usamima@tufs.ac.jp

１．はじめに

「談話」という言葉も，「ポライトネス」という言葉も，ここ十数年の間に，非常によく耳にするようになった。しかし，どちらも未だ，その意味するところは，研究者の立場や文脈によって，微妙に，或いは，大幅に異なっている感がある。故に，読み手は，文脈に応じて，各々の書き手がその用語で何を意味しているかを，しっかり吟味しながら読み進める必要があるというのが現状である。

そういう状況の中，「談話のポライトネス」について論じるには，まず，本稿で用いる用語の意味を明確にしておく必要がある。よって以下では，まず，ポライトネスに関わる用語について，筆者の捉え方や定義をまとめた上で，これまでの日本，及び，欧米におけるポライトネス研究の流れを簡単にまとめる。さらに，これまでいくつか提出されたポライトネス理論の中で，最も包括的であると評されているBrown & Levinsonのポライトネスの普遍理論（1978，1987）の構成と内容を簡潔にまとめ，その有用性を評価した上で，その問題点を指摘する。

その上で，敬語を有する言語とそうでない言語等の，各言語に固有の特性を超えた共通の枠組みでポライトネスを比較・検討するためには，「ポライトネス」を，「言語形式の丁寧度」や「言語表現としての丁寧さ」に影響されやすい「一文，一発話行為レベル」や「いくつかの発話の連鎖レベル」というような短い談話レベルで捉えるだけでは不十分であるということを示す。そして，今後，ポライトネス理論をより普遍的なものへと発展させていくためには，「総体としての談話それ自体」を，ポライトネスを規定する変数の一つに加えて考える「ディスコース・ポライトネス（DP)」という捉え方を導入することが必須であるということを論じ，その基本的な考え方の枠組みを提示する。この提案は，これまで語用論で扱われてきた「絶対的ポライトネス」研究を，「相対的ポライトネス」研究へと拡張することを意味するものでもある。

2．本稿における「ポライトネス（politeness)[2)]」に関わる用語の捉え方・定義

これまで，欧米の広義のポライトネス研究においても，日本の敬語研究などにおいても，「ポライトネス（politeness)」の定義があいまいなままに，「敬意（deference)」「尊敬（respect)」「改まり度（formality)」「丁寧さ（politeness)[3)]」などの用語が，「ポライトネス」と明確に区別されることなく，時には，相互交換可能な意味合いで用いられてきた感がある。これらの用語や概念は，確かに，本稿で後述する「ポライトネス」とも深い関わりはあるが，筆者は，上記の用語や概念と，広義のポライトネスとは，明確に区別して論じられるべきであると考えている。

また，筆者は，「敬語使用」及び「敬語研究」と，「ポライトネス・ストラテジーの使用」及び「ポライトネス研究」も，それぞれ明確に区別して論じられる必要があると考えている。後者の広義のポライトネス研究は，前者（敬語研究）を含むものではあるが，両者の観点や目的は異なるものである。

本稿では，「ポライトネス」という用語は，ポライトネス，及び，ポライトネス理論に対する異なる立場やアプローチ全般に言及する際に用いる場合（広義）と，Brown & Levinsonのポライトネス理論において定義されている「ポライトネス」を指す場合（狭義）と，二通りの意味で用いる。しかし，ポライトネスという用語の使い分けの紛らわしさを解消するために，Brown & Levinsonの定義によるポライトネスのように，発話の運用効果として捉えられた「ポライトネス」を，特に「語用論的ポライトネス」と呼んで，主に，従来的な意味での言葉遣いの丁寧さを指す「規範的ポライトネス」との区別を明確にすることがある。

本稿では，一旦，Usami（1999a）に倣い，「語用論的ポライトネス」を，「円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動」と定義しておく。つまり，言語形式の丁寧度や言語表現の丁寧さのみを扱うのではないということを改めて強調しておく。そのため，文脈に応じて，「実質的ポライトネス」という用語もほぼ同義に用いることもある。しかし，後に展開する「ポライトネスの談話理論構想」では，「円滑な人間関係の確立・維持のために機能しない言語行動」，より強くは，「円滑な人間関係の確立・維持を意図しない言語行動」の効果としての「インポライトネス（失礼，或いは，不愉快な言語行動)」も，マイナス・ポライトネスとして捉え（詳細は後述)，「ポライトネスの談話理論構想」の枠内で，統一的に扱えるものとして位置づける。

後に概観するBrown & Levinson（1987）の理論における「ポライトネス」の定義を最も簡潔に表すと，「円滑な人間関係を確立・維持するための言語的ストラテジー」ということになる。厳密には，この言語的「ストラテジー」という用語の解釈の仕方，扱

い方が，問題となってくるため，筆者は，より広い概念として「言語行動」という用語を用いる。ここでは，Brown & Levinsonのポライトネス理論は，発話の運用効果に焦点を当てた「語用論的ポライトネス」の理論であると言えるということをまず明確にしておきたい。そう考えると，Brown & Levinsonは直接は扱っていないが，彼らの定義する「ポライトネス」には，言語形式や言語表現の「丁寧さ」のみならず，「話題導入頻度」，「あいづちの頻度」（宇佐美，1993a)，「スピーチレベルシフト」（宇佐美，1995)，「中途終了型発話」（宇佐美，1994c)，「いわゆる終助詞「ね」の場面による使い分け」（宇佐美，1994b；1997b)，「「ね」の適切な使用頻度」（宇佐美，1997b)，「依頼談話の構成」（柏崎，1995；謝，2000)，「メタ言語行動」（杉戸，1993等）などの，「談話行動（discourse behavior)」が，含まれるはずである。しかし，これまで，発話の連鎖やメタ言語行動など，談話レベルの要素もポライトネスに関係しているということに言及している研究者は少なからずいたが（Blum-Kulka，1990；1997；Kasper，1990；Leech，1983；杉戸，1993；Thomas 1995等)，それらを本格的にポライトネスの理論に組み込もうとする試みは，Brown & Levinsonも含めて，ほとんどなされてこなかったと言える。そのため，筆者は，一連の研究結果に基づいて，上に挙げたような談話要素とそれらの談話における振るまいを明確に含むポライトネスの概念として，「ディスコース・ポライトネス（DP)」という概念を導入した（宇佐美，1997b；1998b；1998c；Usami，1999a；1999b)。

「ディスコース・ポライトネス」は，以下のように定義する。すなわち，「一文レベル，一発話行為レベルでは捉えることのできない，より長い談話レベルにおける要素，及び，文レベルの要素も含めた諸要素が，語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体（宇佐美，1998c)」である。

ディスコース・ポライトネスは，語用論的ポライトネスの一種であるが，語用論的ポライトネスは，一文，一発話行為レベルでも捉えることができるという意味で，この両者は同一のものではない。ディスコース・ポライトネスは，談話レベルでしか捉えられない語用論的ポライトネスであると言える。

さらに，筆者は，ポライトネスを，「有標ポライトネス（marked politeness)」と「無標ポライトネス（unmarked politeness)」とに分けて考えることを提案する（Usami，1999b)。この観点から考えると，Brown & Levinsonのポライトネス理論は，有標ポライトネスについての理論であると位置づけられる。というのは，彼らは，基本的には，相手のフェイスを脅かす行為（FTA：Face Threatening Act）をせざるを得ないときに，「相手のフェイスを脅かす度合いを軽減する（redress)[4)]」ためにとる言語行動」をポライトネス・ストラテジーとして捉えているからである。筆者は，FT（Face Threat）の度合いの軽減行為を一種の「有標行動」と捉え，その効果としてのポライトネスを，プラス・ポライトネスと呼ぶ。プラス・ポライトネスは，有標・無標の

観点からは，「有標ポライトネス」である。

しかし，一方，我々の日常生活においては，プラス・ポライトネスとは異なるタイプのポライトネスもある。それは，「守られていて当たり前で，ある期待されている言語行動が現われないときに，初めてそれがないことが意識され，ポライトではないと捉えられる」という類のものである。つまり，特別に（有標に）ポライトというわけではないが，特に失礼でもないという発話，及び，その集合体としての談話の状態である。この，特定の状況ごとに暗黙のうちにある「守られていて当たり前なことを満たしている，失礼のない発話」は，「無標行動」であると捉える。無標行動は，ポライトネスの観点からは，「無標ポライトネス」になる。また，個々の発話の集合体としての談話の総体が，「ディスコース・ポライトネス」であるから，無難な日常会話などのように，特別に（有標に）ポライトというわけではないが，特に失礼でもないというやりとりが中心である会話の「ディスコース・ポライトネス」は，談話レベルの「無標ポライトネス」だということになる。

「ディスコース・ポライトネス」には，ある特定の場面・状況における談話の「無標ポライトネス」を構成する，総体としての「基本状態（default）」がある。また，その談話のディスコース・ポライトネスを構成している各要素にも，それぞれ「基本状態」があると捉える。すなわち，「基本状態」には，無標ポライトネスとして認知されている談話の「ディスコース・ポライトネスの基本状態」と，「ディスコース・ポライトネスを構成する談話内の各要素の基本状態」の2種類がある。

スピーチレベルを例に取ると，ある特定の談話において算出した各スピーチレベルの使用率の構成比がその談話のスピーチレベルの「基本状態」であり，使用率が最も高いものを，その談話の「主要（dominant）スピーチレベル」とする。さらに，主要スピーチレベルの使用率が50％を超える場合は，それが「無標スピーチレベル」であると見なす。例えば，Usami（1999a）の社会人の初対面二者間会話においては，72会話の平均値として，文末スピーチレベルの構成比は，概ね，「敬体6：常体1：スピーチレベルを示すマーカーのないもの（中途終了型発話等）：3」であった。このことから，社会人の初対面二者間会話という談話の，ディスコース・ポライトネスの基本状態は，「敬体6：常体1：スピーチレベルを示すマーカーのないもの（中途終了型発話等）：3」という構成であり，このディスコースにおける文末の「主要スピーチレベル」は，敬体であると見なす。また，この場合，敬体使用率は，50％を越えているので，敬体が，このディスコース・ポライトネスの無標スピーチレベルであると同定できるというわけである。故に，このディスコースにおける常体の使用は，有標行動となり，特別な機能を生む。ただ，例えば，「敬体4：常体3：スピーチレベルを示すマーカーのないもの（中途終了型発話等）：3」というような，50％を越えるスピーチレベルが同定されないディスコースも存在する可能性がある。この場合，明確な無標スピーチレベルが存在しないため，有標行動も同定しにくくなる。つまり，明確な無標スピーチレベルが存在する談話と比べて，スピーチレベルのみで，特別の機能（親しみを表したい等）を表すことが困難になる。故に，その場合は，特別な機能は，スピーチレベルの操作以外の方法で表されることになると予測できる。ディスコース・ポライトネスの捉え方の具体例については，後の8．で詳述する。

ここでは，まず，以上のように用語の定義・解釈を確認した上で，これまでのポライトネス研究を概観しておく。

3．これまでのポライトネスに関わる研究

以下に，日本と欧米におけるポライトネスにかかわる研究のこれまでの傾向を，簡単にまとめる。

日本におけるポライトネス研究

複雑な敬語体系をもつ日本語の研究においては，これまでは，主に，言語形式とその相手，状況，場面に応じた言葉の使い分けに焦点をおいた研究が盛んで，膨大，且つ，貴重な研究結果や資料が蓄積されている。しかしながら，あまりにも豊富な言語の形式にとらわれすぎる余り，「慇懃無礼」などの言葉にも表されているような，言語形式の丁寧度の高い表現も，用い方によっては，相手を不愉快にさせることもあるというような，実際の言語使用における「対人関係調節効果」という観点から，敬語使用やその他の言語行動を体系的に捉えようとした研究は，ほとんどなされてこなかった。つまり，後述するBrown & Levinsonの定義する「ポライトネス」のような，より広い概念をカバーするような観点からのポライトネス研究は，皆無であったと言っても過言ではない。

本稿で焦点を当てるポライトネス，及び，ディスコース・ポライトネスという概念は，主に，日本語の自然会話データの分析に基づいた研究から発展させたものであるが，いわゆる敬語の体系や敬語使用の原則についての研究とは，全く，観点や関心が異なるものとして位置づけられる。

欧米のポライトネス研究

一方，欧米においても，日本語の「丁寧さ」や「礼儀正しさ」などと比較的近いニュアンスの「規範的ポライトネス」を明らかにしようとする研究は，言語学者によってなされていた。例えば，“Would you X?,” “Could you X?,” “Can you X?,” “Do X!”などの「丁寧さ」の違いを，できるだけ文脈から切り離して扱い，言語表現の丁寧度の問題として，等級づけようとするような研究である（Fraser，1978）[5]。

しかし，その一方で，最も多くの研究がなされている印・欧言語に，日本語をはじめとする東南アジア諸言語にあるような，敬語というものが存在しないこともあってか，Brown and Gilman（1960）が，ヨーロッパ語における人称代名詞の選択（tu と vous の使い分け等）に焦点を当てて，その背後にある人間関係とポライトネスの関係を分析したのを発端に，「ポライトネス」を言語形式の丁寧度という観点からだけではなく，言語の使用法に焦点を当ててより広く捉えようとする研究が，様々な角度からなされるようになった。つまり，「ポライトネス」の語用論的研究である。その発展は，自ずと，学際的領域としての「語用論」の発展と軌を一にする形となった。

ポライトネスに対する4つのアプローチ

以下に，これまでの「ポライトネス」に対するアプローチの特徴を，Fraser（1990）を参考に4つに分類し，簡単にまとめる。

＜言語形式重視の捉え方＞

(1) 規範的捉え方（social-norm view）一主に，言語形式に重きを置いた初期の研究で，例えば，Would you X? Could you X? Can you X? の丁寧度を質問紙調査で尋ね，その結果から，幾つかの言語形式の丁寧度を同定し，順序づけようとするようなアプローチである。日本における質問紙調査に基づいて言語形式や言語表現の丁寧度を順序づけた敬語研究（荻野，1980；井出他，1986）なども，これに当たると言える。

＜語用論的捉え方（pragmatic view）＞

(2) 会話の原則としての捉え方（conversational-maxim view）

主に，Lakoff（1975），Leech（1983）等のアプローチで，単なる言語形式の丁寧度ではなく，その語用論的側面に焦点を当ててポライトネスを捉え，それをいくつかの「会話の原則」にまとめたものである。語用論的捉え方という新しい観点は導入したものの，それを会話の「原則」のようなものにまとめようとしたという点で，結局は，(1)の「規範的捉え方」から抜けきれていないというのが筆者の捉え方である。

(3) フェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方（Face-saving view）

Brown & Levinson（1978，1987）の捉え方（後に詳述）である。相手のフェイス侵害度を軽減するためのストラテジーというポライトネスの捉え方を導入し，ポライトネスの語用論的側面をダイナミックに捉えている。しかし，日常会話におけるやりとりなどのように，一見フェイスを脅かすとは思われないような言語行動[6]におけるポライトネスをうまく説明できないという問題点がある。

(4) 会話の契約としての捉え方（conversational-contract view）

Fraser（1990）で，その概要が提出されたもので，日常会話におけるポライトネスを，ある種の「会話の契約」に違反しない行為であるとする捉え方である。権利と義務の相互作用についての理解という概念を提出してはいるが，それ以上の具体的な記述がなく，今後の発展は未知数である。

上記4つのうち，(2)〜(4)が語用論的捉え方である。Fraserは，彼自身，70年代後半には（Fraser，1978），(1)の言語形式重視の規範的アプローチに属する研究を行っていたが，Fraser（1990）では，(1)のアプローチは，現在，特に，語用論では，興味の対象とはならないものであると述べている。また，Thomas（1995）も，(1)のアプローチは，社会言語学の対象とはなり得るが，語用論の関心外の問題であり，その対象とはならないことを強調し，Fraser（1990）を参考にポライトネスへのアプローチを分類する際に，(1)は，最初から含めていない。

筆者自身は，社会言語学というものを広義に捉え，語用論的アプローチや研究と社会言語学とは，互いに相容れないものではないと考えている。しかし，Thomas（1995）の主旨は，ポライトネスへのアプローチを考える際，言語形式の丁寧度に焦点を当て，それらを順序づけした標本を作るのが目的であるかのような研究は，少なくとも，語用論が多大な関心を持っているポライトネス研究，ポライトネス理論の探究には寄与しないということを明確にすることであろう。筆者も，これまでのポライトネス理論にかかわる議論を混乱させている大きな原因の一つは，ポライトネスという用語自体の捉え方やポライトネス研究の主関心の違いなどが明確にされないまま，「ポライトネス研究」という同じ名称の枠の中で，まちまちな議論が展開されていることにあるということを，繰り返し論じてきた（特に，宇佐美，1993c；1995；1998c，Usami，1999a等）。ここで，改めて，そのことを強調しておきたい。

4．Brown and Levinsonのポライトネス理論の4つの側面

先に概観した中の，ポライトネスに対する3つの語用論的アプローチの中でも，最も包括的なものとして，ここ20数年来，言語学者のみならず，文化人類学，社会学，社会心理学等，関連諸領域の研究者の興味をも喚起してきたのが，(3)として挙げた，Brown and Levinson（1978，1987）の「ポライトネス理論（politeness theory）」である。彼らが，従来の「礼儀正しさ」や，日本語で言う「丁寧さ」などという言葉のニュアンスでは捉えきれない「ポライトネス」の新しい捉え方を，普遍的であるとして提出して以来，ここ20数年の間に，彼らの理論に触発された多種多様な研究が，様々な言語において行われてきた。その影響力は一領域の枠を超えた絶大なるもので，これま

でに彼らの理論に触発されて行われた研究の数は1500にも上るのではないかと言われている（Fraser，1999）。この理論が，様々な分野の研究者の注目を浴びてきた主な理由は，彼らの理論が「言語的ポライトネス（linguistic politeness）」と銘うちながらも，言語形式だけにとらわれず，人間関係，社会的・心理的距離，ある行為が相手にかける負荷度等，複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮に入れ，それらの相互作用の効果としての，言語行動における「ポライトネス」を，より包括的に取り扱っているからであると言えよう。

しかし，当然ながら，その多大な影響力と比例するかのごとく，彼らの理論に対する批判もまた，様々な観点・角度から行われてきている。しかし，これまで筆者の見る限り，Brown & Levinsonに触発されて行われた膨大な数の研究においては，このポライトネス理論で用いられている用語の解釈や捉え方がまちまちであるばかりでなく，大きく誤解されている場合も多々ある。そのことによって，逆にこの理論の普遍性の検証を試みた研究自体の妥当性や信頼性を疑問視せざるを得ないものも多く，そうした混乱が，それらの研究の意図に反して，この理論の普遍性の妥当な検証を困難にしている感さえある[7]。

Brown & Levinsonのポライトネス理論の骨格は，以下の4つの側面から構成されている。従って，本来は，これら4つの側面をすべて検証した上で，この理論の妥当性が議論されるべきものである。しかし，先に述べたように，Brown & Levinsonのポライトネス理論を批判した数多い研究の中に，以下の4つの側面すべてを吟味した上で，この包括的な理論の妥当性を論じた研究は，ほとんどないといっても過言ではない（Brown，R，1990は，その数少ない一つである）。この理論に対する批判には，普遍理論であるという主張にもかかわらず，日本語の「敬語使用」や中国語の「丁寧さ」を説明しないというような，主に，非印欧言語の研究者が作例や内観に基づいて，各々の言語におけるポライトネスを「規範的ポライトネス」の観点から論じる類のものが一つの派をなしている感がある（Gu，1990；Ide，1989；Mao，1994；Matsumoto，1989等）。また，これらの研究だけでなく，より実証的な研究も含めて，多くの研究は，Brown & Levinsonの理論の4つの側面のどれか1，2を扱っているに過ぎず，4つの側面すべてを実証的に検証した上で，この理論の妥当性を論じようとした研究はほとんどない。

このように，直観的考察や部分的検証結果のみに基づいて，この理論全体の是非まで論じたような論文も数多く，そのことが結果的に，この理論の妥当性の包括的な観点からの正当な検証を妨げることになっている。それのみならず，ポライトネス研究の領域に混乱さえ誘発しているのが現状であると言っても過言ではない。そこで，本稿では，以下に改めて，Brown & Levinsonのポライトネス理論を構成する4つの骨格を整理しておきたい。

(1) 鍵概念

Brown and Levinson の ポライトネス理論 では，「フェイス[8]」という概念を鍵概念としている。すなわち，人間には，基本的欲求として，「ポジティブ・フェイス（positive face）」と「ネガティブ・フェイス（negative face）」という二種類のフェイスがあるとしている。ポジティブ・フェイスとは，他者に理解されたい，好かれたい，賞賛されたいというプラス方向への欲求であり，ネガティブ・フェイスは，賞賛されないまでも，少なくとも，他者に邪魔されたり，立ち入られたくないという，マイナス方向に関わる欲求として捉えられる。「ネガティブ」が「否定的な」という意味ではないことは言うまでもない。つまり，人と人とのかかわり合いにおける人間の，プラス方向にかかわる欲求が「ポジティブ・フェイス」であり，マイナス方向に関わる欲求が「ネガティブ・フェイス」であるというくらいの捉え方が妥当である。簡単に図示すると，図1のようになる。

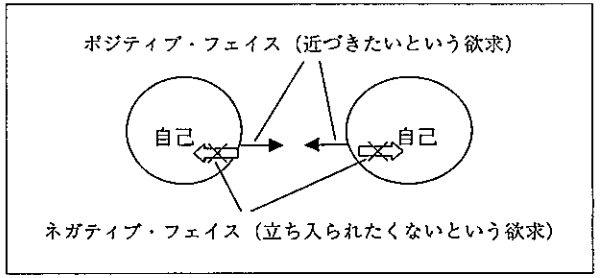


図1　人間の基本的欲求としての二種類のフェイス

Brown & Levinsonは，この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが，ポライトネスであると捉える。そして，それぞれ，ポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」，ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んでいる。

例えば，「依頼」という行為を考えても分かるように，ある種の行為は，本質的に相手のフェイスを脅かす行為になる。人に何かを依頼するということは，相手に時間や労力をかけさせることによって，相手の邪魔されたくないというネガティブ・フェイスを脅かすことになるからである。そして，これらのフェイスを脅かす可能性のある行為を，「フェイス侵害行為（Face Threatening Act：FTA）」と呼んでいる。さらに，「相手のフェイスを脅かす（FT：Face Threat）度合い」，すなわち，「フェイス侵害度（FT度）」が高くなればなるほど，よりポライトなストラテジーが必要になると捉えている。フェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方（Face-saving view）と言われる所以である。

(2) 「フェイス侵害度（相手のフェイスを脅かす度合い）」の見積もりの公式[9]

Brown & Levinsonは，ポライトネスは，「ある発話行為（x）が，相手のフェイスを脅かす度合い」，すなわち，「行為（x）が，相手にかける負荷度（R）」の見積もりに応じて規定されるとする。具体的に数量化できるわけではないが，この相手のフェイス侵害度は，三つの要因によって規定されるとして，以下のように公式化している。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx：フェイス侵害度（FT度），行為（x）が相手のフェイスを脅かす度合い
D：話し手（Speaker）と聞き手（Hearer）の「社会的距離（Social Distance）」
P：聞き手（Hearer）の話し手（Speaker）に対する「力（Power）」
Rx：特定の文化で，ある行為（x）が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重み（absolute ranking of imposition）

つまり，ある行為xが相手のフェイスを脅かす度合い（Wx），すなわち，フェイス侵害度の重みは，xという行為（例えば，旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する）が，ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「行為（x）が，相手にかける負荷度（R）」と，話し手と聞き手の「社会的距離（D）」（対称的関係），聞き手の話し手に対する「相対的力（P）[10]」（非対称的関係）の三要因が関数的に働いて決まってくるとしている。また，xという行為が相手にかける負荷度（R）の重みづけは，文化によって異なるとしている。この最後の，「同じ行為であっても，ある行為xが，相手にかける負荷度の見積もりは，文化によって異なる」ということが，この公式に組み込まれているということを，改めて強調しておきたい。というのは，この理論への批判の中には，文化差を考慮していないという不正確な批判も多いからである。

(3) 具体的ストラテジー

Brown & Levinsonの枠組みでは，「ポライトネス」は，以上に述べた三要因によって規定される「相手のフェイスを脅かす度合い」，すなわち，「フェイス侵害度（Wx）」に応じて使い分けられる「話者の自発的なストラテジー」として捉えられている。そして，以下の5つが主要ストラテジーとしてあげられている。いわゆる「ポライトな」言語行動の分析は，主に，以下の②，③，④が中心となっている。

① FTの軽減行為を行わず，直接的な言語行動をとる。(without redressive action, baldly)

② ポジティブ・ポライトネス（positive politeness）
③ ネガティブ・ポライトネス（negative politeness）
④ 伝達意図を明示的に表さない（ほのめかす）。(off record)
⑤ FTAを行わない。(doing no FTA)

彼らの言うように広い意味でポライトネスを捉えるなら，これまでの日本における「いく」「いらっしゃる」「おいでになる」などの言語形式の丁寧度やその相手に応じた使い分けに焦点をあてた膨大な敬語研究は，「既に文法化・語彙化されているネガティブ・ポライトネス」の研究であったと言ってもいいだろう。また，従来の英語における「丁寧さ」に関する研究でもよく取り上げられてきた「慣用的間接表現」「垣根表現(hedge)」「名詞化」なども，Brown & Levinsonの枠組みでは，ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとなる。

上記の例も含めて，彼らは，ポジティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを15，ネガティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを10，オフ・レコードの主要ストラテジーを15挙げている。これら主要ストラテジーは，さらにいくつかの，より具体的なストラテジーに分類されているが，ここでは，各主要ストラテジーの主な例をあげるにとどめる。①の直接的な言語行動とは，緊急の場合等，簡潔に物事を述べたほうが良い場合に適用される。「お気をつけ下さいますようお願い申し上げます。」より，「気をつけて！」の方が適切な場合があるだろう。②のポジティブ・ポライトネスとは，先にあげた，相手の他者から認められたいというポジティブ・フェイスを満たしてあげるように，相手の何かを誉めたり，共通の興味を強調したり，相手を楽しくさせるような冗談を言ったりすることである。③のネガティブ・ポライトネスは，他者に邪魔されたくないという相手のネガティブ・フェイスを保つために，何かを依頼するなど，どうしても相手のフェイスを脅かす行為を行わなくてはならないときに，その度合いを少しでも軽減するように，押しつけがましくない，相手に断る余地を与えるような，間接的な表現をするということである。「傘を貸して下さい。」より，「もし，よろしかったら，傘を貸していただけないでしょうか？」のほうが，よりポライトなのは，この理由による。④の「伝達意図を明示的に表さない」とは，傘を借りたい場合に，依頼をはっきり言語で表現しないで，「今日，傘を持ってくるのを忘れてしまったんです…。」のように，ほのめかすにとどめる場合である。この発話は，はっきり傘を貸してくれるよう依頼しているわけではなく，この発話をどう解釈するかは，聞き手にかかっている。その意味で，聞き手のネガティブ・フェイスを脅かすことを最小限にとどめていると言える。⑤は，相手のフェイスを脅かすような行為はしない。つまり，傘を借りたいという意を表明しないし，ほのめかしもしないということである。Brown and Levinson は，この枠組みで，ほとんどの文化・言語におけるポライトな言語表現が説明できると主張している。

また，Brown & Levinsonは，相手に敬意を表すと同時に，社会における話者間の関係を指標することにもなる敬語を有する言語においては，「敬語使用の原則を守っている」ということは，「その社会の規範に基づいた敬語使用を守ることによって，相手の立場を侵さない」という意味で，基本的には，相手のネガティブ・フェイスを尊重するネガティブ・ポライトネスになっていると捉えている。筆者も，そのような捉え方で，大筋としては問題ないと考えているが，複雑な敬語体系を持つ言語において，「敬語使用の原則を守っている」ということをひとまとめにして，「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と片づけてしまうのは，少し大雑把に過ぎると言えるかもしれない。この辺りが，彼らの理論が，「敬語を有する言語」におけるポライトネス行動を，うまく説明していないという批判を誘発する所以にもなっているところであり，もう少し詰めていく必要のある点でもある。

また，数多く例が挙げられている具体的なストラテジーに関しては，例えば，「贈り物をする」などの言語行動以外の行為が，ポジティブ・ポライトネスのストラテジーの中に混在している，各々のストラテジー間に重複するものや，違いが明確でないものがある等々，多くの批判が出ている。これらの点は，確かにもう少し整理する必要があるところではあるが，この包括的な理論全体を根本的に覆すような決定的な問題とはなり得ていないというのが筆者の見方である。

(4) ストラテジーの選択を決定する情況

Brown & Levinsonは，さらに，上記5つのストラテジーのどれを選択するかは，相手のフェイス侵害度の見積もりに応じて決定される傾向にあるとして，「ストラテジーの選択を決定する情況」を，以下の図2のように表している。

相手のフェイスを脅かす度合い，すなわち，「フェイス侵害度（FT度）」があまりにも高い場合には，そのFTAを行わないという選択がなされる可能性が高い。つまり，FTAを行わないのが最善の策ということである。しかし，FTAを行わざるを得ない場合は，伝達意図を明示するかしないかに分かれる。「フェイス侵害度」が大きいと思われる場合は，「ほのめかす」などの非明示的ストラテジー（off record）が取られることが多い。言語で明示的に表現する場合（on record）は，さらに，「直接的に言う（bald on record）」場合と，何らかのFT軽減行為（redressive action）を行う場合とに分かれる。FT軽減行為を行う場合には，ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテジーがあるというわけである。

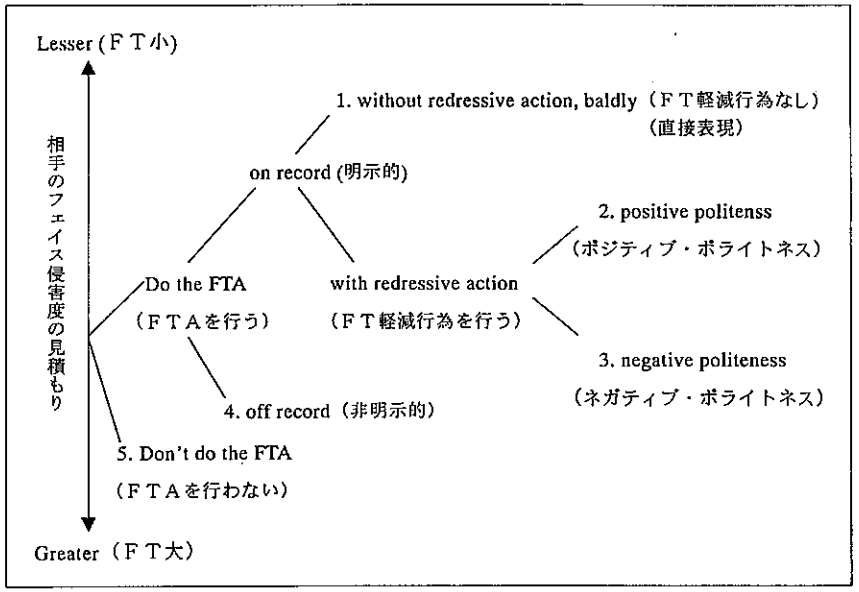


図２　ストラテジーの選択を決定する情況
(from Brown & Levinson 1987: 60；一部簡略化。訳は筆者)

彼らのこの図は，FTが比較的高い場合は非明示的ストラテジーが選択されやすく，FTが小さくなるにつれ，ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー，ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが，この順に選択されやすくなるということを示している。つまり，ポジティブ・ポライトネスは，話し手が，相手の「フェイス侵害度」が低いと見積もった場合に用いられやすく，FTが最も低いと見積もられた場合は，直接表現が選択されやすいということである。

5．Brown & Levinsonのポライトネス理論の斬新な点

以上のまとめの中でもいくつか触れたように，この理論には，未だ様々な周辺的な問題点がある。それにもかかわらず，関連諸分野にも影響を与え，これまで提出されたポライトネス理論の中では，最も包括的なものであるとの評価が高い理由としては，以下のような点が挙げられるだろう。

(1) LakoffやLeechが，言語形式自体の丁寧度の問題を越えて，ポライトネスへの語用論的アプローチを試みたことは評価できる。しかし，彼らがそれを，「こうい

う原則を守れば，ポライトになる」というような，いくつかの「会話の原則」のようなものにまとめたことによって，結局は，ポライトネスの「規範的捉え方」から抜けきれていないという感を免れ得なかった。また，いくつかの原則の間の優先順位などを規定する「原則」が示されていなかったために，個々のケースの解釈はできても，いくつかの原則にかかわることが共存している場合，どの原則が優先されるかということについての予測がしにくいという問題点があった。また，彼らの言う「原則」には，文化による違いが充分に取り込まれていないという問題点もあった。

これに対して，Brown & Levinsonは，フェイス保持のためのストラテジーという概念を基に，相手の「フェイス侵害度（FT度）」を見積もる公式を提出した。先に示した「Wx＝D(S, H)＋P (H, S)＋Rx」である。これによって，従来，いくつかの非連続的な「原則」に従った行動として捉えられていた「ポライトネス」を，話者が，相手との社会的距離（D）や力関係（P），行為（x）が相手にかける負荷度（R）などの社会的・文化的要因の重みを「総合的に」見積もって，その「度合い」に応じた言語行動を選ぶという，ある程度，予測可能で，動的な捉え方に変換した。この点が，いくつかの「原則」にまとめた従来のポライトネスの捉え方と大きく異なる点であり，また，最も評価されるべき点であると筆者は考えている。

この，社会的距離（D），力関係（P），相手にかける負荷度（R）という社会的変数のうち，社会的距離（D）と力関係（P）は，日本の敬語研究で指摘されてきた，「親疎」，「上下」という社会的変数と非常によく似ている。しかし，これらの社会的変数を，静的，固定的，分離的に捉えて，これらの変数のうち，どれが最も影響力が強いかを択一的に同定しようとするアプローチではなく，これらの変数が，「Wx＝D(S,H)＋P(H, S)＋Rx」という公式の中で「総合的に」考慮されて，相手のフェイス侵害度が見積もられた上で，言語行動が決定されるという捉え方は，言語行動を，より動的，連続的に捉えることを可能にしており，「いくつかの重要な社会的変数が言語行動にいかに影響を与えるか」ということを探究するアプローチの方法としても，従来の敬語研究のアプローチと大きく異なっていると言える[11]。

もう一つ，この公式の優れている点は，この理論には，文化差が考慮されていないという誤解に基づく批判とは逆に，実際には，同じ行為でも，文化によって捉えられ方が異なるということを前提とし，それが，異なるR（ある行為が相手にかける負荷度）の重みづけの違いとなって，相手のフェイス侵害度の見積もりに反映されるという形で，文化差が重要な変数の一つとして，組み込まれているという点である。

(2) もう一つ，この理論の斬新な点は，これまで一般には，「ポライトだ」という一般的概念とは合い入れなかったような，「仲間うちのマーカーを使う」ということや，「冗談を言う」というようなことを，ポジティブ・ポライトネスとして，彼らの定義するポライトネスの中の重要な言語ストラテジーとして前面に打ち出したことである。また，このような，広義の「ポライトネス」の概念を提出することによって，「ポライトネス研究」を，従来のように，いわゆる「丁寧な言葉使い」の等級づけリストを作り，ある社会における「丁寧な言葉使い」の「社会言語学的規範」を明らかにするという方向ではなく，逆に，丁寧度の高い言葉が不愉快に感じられることがあるのはなぜか，人は，なぜ既存の社会言語学的規範からはずれている言葉でも，心地よいと感じることがあるのかというような，まさに「対人コミュニケーション」の観点からの興味や疑問にも答え得るものに発展させたことにあると言える。この点が，この理論が言語学のみならず，文化人類学，社会学，社会心理学などの隣接諸科学の関心を喚起した所以でもある。また，ポジティブ・ポライトネスという概念を導入することによって，構造が異なる各々の言語・文化におけるポライトネスの比較のための共通基盤を広げたことも，大きな功績であると言える。

しかし，「冗談を言う」ことを「ポライトだ」とする捉え方は，日本人のみならず，一般の英語話者にも馴染みが深いものではないようで，英語話者の中にも，“politeness”という用語は誤解を生みやすいので，適切ではないのではないかという指摘もあった（Green，1992；Walle and Van de Poel，1993）。しかし，一方で，欧米の雑誌などでは，既に何度か“politeness”の特集が組まれ（Multilingua，8 2/3，1989；Journal of Pragmatics，Vol.14，no.2，1990；Journal of Pragmatics，Vol.21，no.5，1994），最近の語用論の概説書（Thomas，1995；Yule，1996）でも，Brown & Levinsonのポライトネス理論は大きく取り上げられており，Brown & Levinsonが定義しているポライトネスの概念も，関連領域では，ほぼ定着してきたと言ってもいいだろう。（しかし，現在でも，依然として，ポライトネスの捉え方や解釈の違い，誤解が見られることも否めないが。）

ただ，日本語に関しては，例えば，ポジティブ・ポライトネスを表すために「仲間うちの言葉を使う」ということは，普通は，言語形式の丁寧度を敬体から常体に下げることになる。敬語を使うことが，「丁寧だ」という観念を刷り込まれている大多数の日本語母語話者にとっては，仲間うちの言葉を使うということは，「言語形式の丁寧度を下げる」ことになるので，それを，言語行動としてポジティブに「ポライトだ」と捉えるポジティブ・ポライトネスという発想は，英語話者にも増して，なかなか理解しにくいようである。「言語形式の丁寧度が低

い」ということと「ポライトだ」ということの間にギャップが生じるためである。しかし，Brown & Levinsonの「ポライトネス理論」のみならず，語用論的にポライトネスを考える際には，従来の発想を転換することが必要である。また，後述するように，自然会話データを分析すると，日本語の会話においても，無意識のうちにもポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが様々な形で用いられていることがよくわかるのである。

6．Brown & Levinsonのポライトネス理論の問題点

Brown & Levinsonのポライトネス理論に対する様々な観点からの批判の概観と幾つかの批判（Ide,1989; Matsumoto, 1988等）自体の妥当性については，宇佐美（1998c），Usami（1999a）で考察した。故に，ここでは，筆者の観点から見たBrown・&Levinsonの理論の問題点を，以下に簡単にまとめるに留めたい。

前項で述べたように，筆者は，Brown & Levinsonのポライトネス理論は，幾つかの周辺的な問題は残しながらも，総合的に判断して，現段階の発話行為レベルのポライトネスに関する理論としては，最も包括的であり，有効な理論であると捉えている。しかし，英語などのような敬語を有さない言語と日本語のような敬語を有する言語のポライトネスを，より公平な同一の枠組みで比較・検討できるものにするためには，彼らの理論には，以下のような問題点がある。

(1) 一発話行為レベル，多くて幾つかの発話行為の連鎖（sequences）レベルの分析に留まっており，より長い談話におけるポライトネスをうまく説明できない。

(2) 方略的言語使用としてのポライトネスに重きをおいているにもかかわらず，基本的に，ポライトネスを文レベル，発話行為レベルで捉えているために，日本語などのように語用論的に制約力をもつ複雑な敬語体系を有する言語における「文レベル，発話行為レベルのポライトネス」をうまく説明できないものになっている。つまり，逆に言えば，そのことが，敬語を有する言語においては，特に，方略的言語使用は，文レベル，発話行為レベルには，現われにくいという事実をより明確にしたということである。

(3) (1)及び(2)の事実が，文レベル，発話行為レベルでポライトネスを捉えることの問題点を，露呈している。つまり，文レベル，発話行為レベルでポライトネスを捉えると，諸言語における文法構造の違いや，敬語を有する言語における敬語使用の原則の制約などが強く影響するため，諸言語のポライトネスを公平に比較・検討し，統一的に説明することが困難になる。

(4) 英語などのような敬語のない言語にも厳然としてある，「社会言語学的規範(sociolinguistic norms)[12]」が「話者個人の方略的な言語使用」に与える影響が，ほとんど考慮されていない。

(5) ポライトネスを発話行為レベルにおけるフェイス保持のストラテジー（Face-saving strategy）として捉えているため，一見，「フェイス侵害行為（Face Threatening Acts:FTA)」がないように見うけられる「日常会話（ordinary conversation)」などにおける「無標ポライトネス（unmarked politeness)」，すなわち，「ある言語行動があって当たり前で，それが欠如すると初めてポライトでないと感じられるようなポライトネス」をうまく説明できない。

(6) (5)で述べた，「特にポライトでもないが，失礼でもない」言語行動や，「ポライトでない」言語行動，つまり「インポライトネス」を，ポライトネス理論の中で，どのように位置づけ，扱うのかが提示されていない。

(7) フェイス侵害度（FT度）の見積もりの公式を導入した点は評価できるが，この理論は，どちらかと言うと，話し手に焦点を当てたものになっている。例えば，フェイス侵害度（FT度）の見積もりに際しても，現実には，話し手の見積もりと，聞き手の見積もりが異なる場合もままある。そのずれの度合いによっては，話し手の意図に反して，聞き手が話し手の言語行動を，失礼だと受け取る場合もあるだろう。このような聞き手の側からの観点，及び，話者の相互作用の観点が，この理論には充分に組み込まれていない。

7．なぜ「ディスコース・ポライトネス(DP)」という捉え方が必要なのか ―発想の転換―

以上にまとめたような，Brown & Levinsonの理論の問題点を解決し，ポライトネスの理論をより普遍的なものへと発展させるためには，敬語を有する諸言語の，それぞれ異なる敬語使用の原則を越えてある，「円滑なコミュニケーションのための言語行動」の原則を，敬語を有さない言語のそれも含めて，公平に同じ枠組みで論じられるようにしなければならない。そのためには，以下の点を認識する必要がある。

(1) 各言語の構造の違いが大きく影響する文レベルにおける言語表現の比較は不適切である。

(2) 敬語を有する言語においては，従来のように，文レベルにおける「言語形式の丁寧度」だけの問題としてポライトネスを捉えるという発想を転換し，実際の言語使用における発話効果としての語用論的ポライトネスという観点から，ポライトネスを捉え直す必要がある。

(3) 敬語を有さない言語においては，敬語使用の原則による語用論的制約に相当するような「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」にも，もっと注目する必要

がある。

(4) 敬語を有する言語，そうでない言語双方において，ポライトネスは，「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」，また，両者の「相互作用」も考慮して，「談話レベル」で捉えていく必要がある。

(5) Brown & Levinsonが唱えた，一発話行為レベルにおけるフェイス保持ためのストラテジーとしてのポライトネスを，ここでは，「有標ポライトネス（marked politeness)」と呼ぶが，それとは異なるタイプの，「守られていて当たり前で，ある期待される言語行動がないときに，初めてそれが意識され，失礼，不愉快だと捉えられる」という「無標ポライトネス（unmarked politeness)」としての「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し，両者を区別して考える必要がある。また，両者を統合するポライトネスの談話理論を構築する必要がある。

(6) そのためには，発話の連鎖やまとまり，すなわち，文を超えた単位としてのみ談話を捉えるのではなく，また，幾つかの発話の連鎖を分析対象とするという意味での談話レベルの分析だけではなく，発想を転換して，「談話」そのものを対象とする必要がある。例えば，「社会人の初対面の会話」や，「20代の親しい友人同士の会話」というような一つの「活動の型（activity type)[13]」とも言える，特定の談話の無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスを，まず同定する。そして，そのディスコース・ポライトネスを形作っている諸要素の機能の総体としての「談話」それ自体を，その談話の「基本状態（default)」として，語用論的ポライトネスを規定する変数の一つに加えることによって，ポライトネス理論を「ポライトネスの談話理論」に発展させるのである。このような捉え方をすることによって，逆に，文レベルの現象の機能がより明確に見えてくることもある。例えば，尊敬語や謙譲語の使用・不使用の機能や効果の分析（Usami, 1999a；宇佐美，2001）は，そのよい例である。

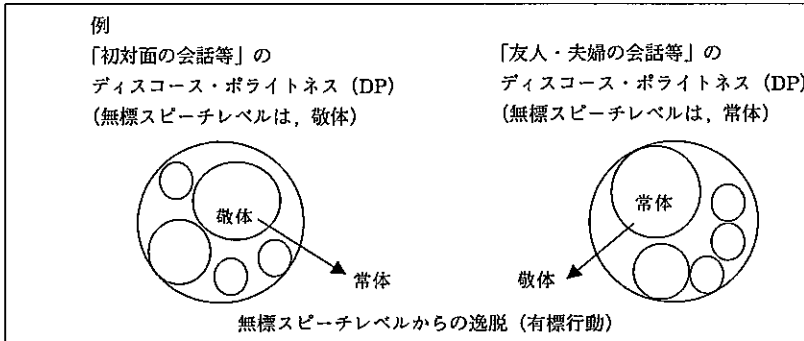
ポライトネスの談話理論では，(5)(6)で述べた「無標ポライトネス」にも対象を広げるとともに，失礼，或いは，不愉快な言語行動，すなわち「インポライトネス」も「マイナス・ポライトネス」として，同じ枠組みの中で位置づけていく。このように考えていくと，「ポライトネスの談話理論」は，ひいては，「故意に失礼になる場合」の動機に関わる変数なども含めた「対人コミュニケーション理論」へと，発展させていく必要があるだろう。しかし，現段階では，「ディスコース・ポライトネス」という捉え方を導入し，まずは，ポライトネスの談話理論としての構想を提示することから始めたい。

8．「ディスコース・ポライトネス」の基本状態からの「動き」が生み出す発話効果としてのポライトネス—日本語と英語の例—

次に，活動の型，或いは，場面ごとに異なる無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の例を，以下の図3に示しながら，もう少し具体的に説明する。

ディスコース・ポライトネスを構成する要素は，先にも述べたとおり，言語形式としてのスピーチレベルだけではなく，適切なあいづちの打ち方や頻度，話題導入の頻度，依頼を切り出すまでの発話の連鎖のパターンなどの談話行動も含んでいる。ただ，ここでは，便宜上，ディスコース・ポライトネスの一要素としてのスピーチレベルを例に取って説明する。

以下の例では，「有標行動」とは，ディスコース・ポライトネスの要素のうち，その使用頻度が50%を越える「無標」の言語行動（スピーチレベルが敬体，或いは，常体）からの，一発話レベルの逸脱である。しかし，理論的には，談話レベルの，ある「発話連鎖のパターン」が「無標」であると捉えられることもあるので，「無標行動」には，無標の要素を選択している発話と，その集まりとしての談話レベルの行動の両方があり得る。



有標行動が特別の機能（プラス・ポライトネス，言語的談話効果，マイナス・ポライトネス）を生む。

注：・外側の大円は，諸要素の総体としてのディスコース・ポライトネスを表す。
・内側にある小円は，例えば，「あいづち」や「話題導入」の頻度など，ディスコース・ポライトネスの要素と考えられるものを想定し，象徴的に表したものである。その数は，上記のように5つとは限らない。
・小円のうち，矢印が出ているものは，それぞれの談話における「無標スピーチレベル」を表している。

図3　特定の「活動の型」における無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」

「有標行動」も同様である。無標の発話連鎖のパターンとは異なる発話連鎖のパターンは，有標行動と捉えられる。つまり，有標行動，無標行動は，一発話レベル，談話レベルの双方から捉えられるものである。

図3の例で言うと，「初対面の会話」における「ディスコース・ポライトネス」の一要素であるスピーチレベルの，基本状態における無標スピーチレベルは，「敬体」である。そのため，このディスコースにおいては，スピーチレベルという要素に関しては，基本的には，敬体を使用していれば，無標ポライトネスを守っていることになる。故に，「常体」の使用は有標行動となり，何らかの特別な機能・効果を生む。理論的には，有標行動は，次の3通りの効果をもたらす可能性がある。①プラス・ポライトネス効果（この場合，親しみを表すポジティブ・ポライトネス）を生む場合と，②命題内容を強調するなどの「言語的談話効果」を生む場合，そして，③マイナス・ポライトネス効果を生む（つまり失礼になる）場合の3つである。

図3の例の説明に戻る。「友人・夫婦の会話等」という活動の型におけるディスコース・ポライトネスの基本状態の無標スピーチレベルは，逆に，「常体」である。そのため，これまでの言語形式の丁寧度の捉え方とは全く異なり，このディスコースでは，「常体」が，無標ポライトネスとなる。つまり，この談話における「常体」の使用は，ディスコース・ポライトネスとして十分にポライトであると捉えるのである。逆に，この談話で「敬体」を用いることは有標行動となり，それは言語形式の丁寧度とは反対に，この活動の型のディスコース・ポライトネスの無標スピーチレベルである常体を使用していないという意味で，ポライトではない，すなわち，インポライトネス効果を生むことさえある。このことは，ディスコース・ポライトネスの基本状態における無標スピーチレベルが常体である談話（簡単に言うと，通常常体を使っている人や場面での会話）においては，敬体は，皮肉を述べる時やけんかの際に用いられるという日常生活の観察からも分かるだろう。つまり，常体が無標である談話においては，有標行動となる敬体の使用は，言語形式自体は，「敬体」であるにもかかわらず，失礼になる場合も含めて，先の例と同様に，以下の3通りの効果を生む可能性があるのである。すなわち，①プラス・ポライトネス効果を生む（この場合，特別にネガティブ・ポライトネスを高める）か，②命題内容を強調する，話題の転換を示すなどの「言語的談話効果」を生むか，③マイナス・ポライトネス効果を生む（いやみになる）か，である。

このように，実質的に，語用論的ポライトネスの効果を生み出すのは，「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく，特定の状況や場面における無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の「基本状態」からの離脱や回帰という，言語使用の「動き」であると捉えるのである。この有標行動のポライトネスは，ディスコース・ポライトネスの基本状態を同定した上で，そこから相対的に捉える「相対的ポライトネス」として位置づけられる。また，この基本状態からの動きは，命題内容を強調するというようなディスコース・モダリティ（Maynard，1993）や話題の転換を示すというような談話標識としての機能（宇佐美，1995）などの「言語的談話効果」も生む。

有標・無標ポライトネスの観点からは，上記①のプラス・ポライトネスは，有標ポライトネス，②の言語的談話効果は，有標行動によって生み出された効果であるが，ポライトネスの観点からは，無標ポライトネスを構成する要素であるため，無標ポライトネスと捉えられる。③のマイナス・ポライトネスは，失礼，或いは，不愉快な言語行動としての「インポライトネス」であるが，有標・無標の観点からは，有標ポライトネスと位置づけられる。

このような捉え方をすると，例えば，英語などでも観察される同じような現象を同一原理で説明できる。また，その他の異なる言語における語用論的ポライトネスを，同じ枠組みで解釈することが可能になる。以下に，Thomas（1995；トマス著，（翻訳）浅羽亮一監修，1998）に豊富に挙げられている英語の例をいくつか見ながら説明する。

例1

［ジェームス・サーバーの短編より］

［ある夫婦がどのレストランで食事をしようか思案している。夫が言う。］

You choose.（君，選べよ。）

トマス著，浅羽監修（1998：170）

トマスは，言語形式や言語表現の丁寧度を，ポライトネスと同一視するのは，問題であるということを強調する文脈の中で，この例をあげて，「この場合，直接的な命令文が使われているが，通常これは完全にポライトであると見なされる。なぜなら，この発話行為は，リーチ（1983a：107-8）の言うところの「聞き手にとって有益な」ものであるからである」と説明している。しかし，この説明は，訳文の日本語で考えると分かるように，日本語の説明としては使えない。つまり，いくら「聞き手にとって有益な」発話でも，相手がいわゆる目上や初対面の相手の場合は，「君，選べよ」と言うことは，ポライトであるとは言えないからである。訳を「選んでください」くらいにすると，最低限のポライトネスを満たしていると言えるかもしれないが，しかし，そうすると，日本語においては，後者の訳「選んでください」のほうが，「君，選べよ」より言語表現の丁寧度も高くなるので，今度は，この例でトマスが示したかった「言語形式の丁寧度と，その発話行為から生じるポライトネスとの間には，必然的なつながりがない」ということが，少なくとも，この翻訳例では言えなくなる。つまり，英語におけるポライトネス効果を変えることなく日本語に翻訳するのは不可能だということである。この例が明らかにしていることは，各々の言語の構造や特徴の違いが大きく影響せざるを得ない

一発話行為レベルで，異なる言語のポライトネスを統一的に説明しようとすることには，無理があるということである。

さて，トマスは，言語形式や言語表現それ自体と，その発話行為から生じるポライトネスとの間には必然的関係がないことを論じるために，先の例に続いて，同じくジェームス・サーバーの短編から，次の例を挙げている。

例2

［ジェームス・サーバーの短編より］

'Will you be kind enough to tell me what time it is?'
（今何時かおっしゃっていただけますでしょうか？）

［その後で］

'If you'll be kind enough to speed up a little.'
（もしちょっとスピードをあげていただけるのでしたら）

［トマス著，浅羽監修（1998：170）］

この例について，トマス自身は，次のように説明している。

「表面的には（つまり，状況がなければ），これらの依頼表現は，より普通の「何時？」(What's the time?)」とか「急いで！」(Hurry up!) などよりもポライトである。しかし，親密な関係の中ではこれらは変にもってまわった言い方に見える。実際，この夫婦は互いに対してだんだんイライラを募らせていて，妻が使っているますます念の入った依頼表現は，彼女が実は夫に対して次第に腹を立てて言っていることを示している。」

［トマス著，浅羽監修（1998：170）］

例1の場合には，トマスが説明しているように，リーチの「丁寧さの原理」を用いても，「なぜ例1の発話が，直接的命令文を用いているにもかかわらず，ポライトであると捉えられるか」ということの解釈はできる。しかし，例2の場合は，リーチの「丁寧さの原理」では，「間接的表現を用いているにもかかわらず，なぜそれがポライトだと捉えられないか」の説明ができない。トマス自身も，例2については，「親密な関係の中ではこれらは変にもってまわった言い方に見える」と言及しているだけで，人が，なぜ，そのように受け取るのかについての考察はない。

しかし，「ディスコース・ポライトネス」という概念を用いると，例1，2とも共通の原則で解釈が可能になる。つまり，イギリスの夫婦の間では，無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの「基本状態」は，You choose，What's the time?，Hurry up!などのような「直接的な表現」であると仮定できる。故に，例1の 'You choose' の場合は，たとえ言語表現は直接的でも，それが無標ポライトネスとなっているので，トマスも言うとおり，十分にポライトであると言える（むしろ，「失礼ではない」と言ったほうがよいかもしれない）。逆に，例2の場合は，やはり夫婦の会話であるから，ディスコース・ポライトネスの基本状態は，「直接的な表現」であると仮定できる。「直接的な表現」が無標ポライトネスである「談話」において，非常に間接的な表現をすることは，有標行動となる。先述のように，有標行動が生み出す機能には，プラス・ポライトネス効果，言語的談話効果，マイナス・ポライトネス効果の3通りがある。トマスによる，例2の発話がなされた文脈の説明（妻が夫に対して次第に腹を立てて言っている）によると，いわゆる丁寧な表現を用いてはいるが，例2の有標行動が生み出した効果は，マイナス・ポライトネス効果であったと言えるだろう。

リーチ（1987：146）は，「『場面との関連での丁寧さ（相対的丁寧さ）』という観点から見れば，『言語表現の丁寧さ』と『実際の効果としてのポライトネス』が逆転することもある」ということに触れている。しかし，人はなぜそのように解釈するのかについての説明はない。また，一般語用論の主関心は，「言語表現自体の丁寧さ（絶対的丁寧さ）」である（同：118）と述べている。一方，Brown & Levinsonのポライトネス理論が中心的に扱っているのは，FTを軽減するように配慮した行動（主に，ネガティブ・ポライトネス）と，プラス・ポライトネス効果をねらった有標行動（主に，ポジティブ・ポライトネス），つまり有標ポライトネスであると言える。筆者は，談話の総体のポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態，及び，有標でない発話のポライトネスを「無標ポライトネス」と捉え，有標ポライトネスと区別して考える。このように考えると，ディスコース・ポライトネスという捉え方を導入し，ポライトネスの談話理論の構築を目指すということは，これまでの語用論で中心的に扱われてきた「絶対的ポライトネス」，すなわち，「一発話行為レベル」の「有標ポライトネス」の研究に，「相対的ポライトネス」，「談話レベルのポライトネス」，「無標ポライトネス」という概念も加えた，より広いポライトネス研究へと研究対象を拡大することでもある。

本稿では，日本語と英語の例を挙げて考察したに過ぎないが，このような無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し，相対的にポライトネスを捉えると，少なくとも，敬語を有する言語である日本語のポライトネスと，いわゆる敬語のない言語である英語のポライトネスを，両言語の構造の違いによる影響を最小限に留めながら，同じ枠組みで解釈できるようになる。つまり，英語においても，語用論的ポライトネスを規定しているのは，「基本状態」からの逸脱という「動き」であると捉えることができるということである。そして，このことは，日本語，英語以外の言語にもかなり適用できるのではないかと，現状では考えている。その他の言語のデ

ータを検討することと，有標行動を生み出す動機の分類・体系化，有標行動の効果の予測・同定のプロセスの具体化などが今後の課題である。

9．ディスコース・ポライトネスの基本状態の同定方法

繰り返し述べるように，ディスコース・ポライトネスを構成する要素は，言語形式としてのスピーチレベルだけではなく，適切なあいづちの打ち方や頻度，話題導入の頻度，発話連鎖のパターンなどの談話行動も含んでいる。ただ，ここでも，なるべく分かりやすくするために，ディスコース・ポライトネスの一要素としてのスピーチレベルを例に取って説明する。

これまでの例では，「初対面の会話」や「夫婦の会話」などのように，スピーチレベルの基本状態が，直感的にも比較的想定しやすい「活動の型」としての談話を例に話を進めてきた。前者では，敬体が基本状態の無標スピーチレベルで，後者では，常体が基本状態の無標スピーチレベルであるというような説明である。しかし，理論的には，ディスコース・ポライトネスは動的なもので，活動の型ごとにその基本状態が固定的・静的に決まっているものだとは捉えていない。そもそも，活動の型という捉え方自体が，レヴィンソンが言うように，「境界のはっきりしないカテゴリーである」。つまり，いわゆる場面や状況というものは，個人の話し方をある程度規定する面はあるものの，全面的に個人の言語使用を決定するものではなく，むしろ，個人の言語使用が，「事象」を形成していくものであると捉えるのである。

故に，ある特定のディスコース・ポライトネスの基本状態というものは，理論的には，例えば，「初対面の会話」というような活動の型のみによって規定されるものではなく，個々の会話ごとに，話者間で交渉されつつ形成されていった「談話」を分析することによって，はじめて同定できるものと捉える。すなわち，スピーチレベルを例に取ると，ある特定の談話のスピーチレベルの基本状態は，その談話の要素である一つ一つの発話のスピーチレベルを分類し集計した結果としての，各々のスピーチレベルの構成比であると同定される。スピーチレベルと，そのシフト操作などをディスコース・ポライトネスの観点から分析したUsami（1999a）の結果を例に取ると，社会人の初対面二者間会話におけるスピーチレベルの基本状態は，中途終了型発話など文末のスピーチレベルを示すマーカーのない発話も含めると，72会話の平均値として，「敬体6：常体1：マーカーなし3」，であった。このことから，この特定の談話（社会人の初対面二者間会話の冒頭部）のスピーチレベルの構成比の基本状態は，「敬体6：常体1：マーカーなし3」であり，無標スピーチレベルは敬体であると同定できる。そして，この特定の談話において同定された基本状態からの離脱や回帰というスピーチレベルの「動き」，すなわち，スピーチレベルの「シフト」を分析することによって，その談話における「発話効果としての語用論的ポライトネス」に果たすスピーチレベルシフトの役割，すなわち，「有標行動」の機能を分析するのである。

このように考えると，無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスは，例えば，「友人との会話」という活動の型ごとにではなく，「友人Aとの会話」，「友人Bとの会話」など，それぞれ特定の相手との会話におけるディスコース・ポライトネスの基本状態を同定した上で，その談話における有標行動が生み出す機能を考えていくことができるものとして捉えることができる。また，個人差や場面の違いによって，同じ言語行動（例えば，敬体使用）が生み出す効果が異なることも説明しやすくなる。

一口に友人と言っても様々であるが，個人のタイプや二人の関係などの影響を受けて，例えば，友人Aとは，比較的敬体で話すことが多い等の傾向は，日常生活の中では，ある程度決まっているはずである（これも，常に変化可能ではあるが…）。とすれば，例えば，（文脈やイントネーション等を抜きにして例をあげるのは難しいが），Aが「そうなんです」と言っても，それは無標ポライトネスであり，特別な解釈はしないが，いつもほとんど常体で話している友人Bが，「そうなんです」と言った場合には，それは有標行動となり，大きくは，少しおどけているか（プラス・ポライトネスとしてのポジティブ・ポライトネス），怒って距離をおこうとしているか（マイナス・ポライトネス），或いは，命題内容を強調したいか（言語的談話効果）のいずれかの解釈をすることになるだろう。

また，例えば，「初対面の会話」でも，特に，若い同年代の話者同士の会話などでは，会話の最初のうちは敬体が多かったのが，時間が経って互いに打ち解けていくにつれ，常体の割合が増えていくということも十分考えられる。そのような場合，「初対面の会話の基本状態の無標スピーチレベルは敬体である」というように，固定的，静的に捉えていると，問題が生じてくる。このような場合は，以下の図4のように考える。

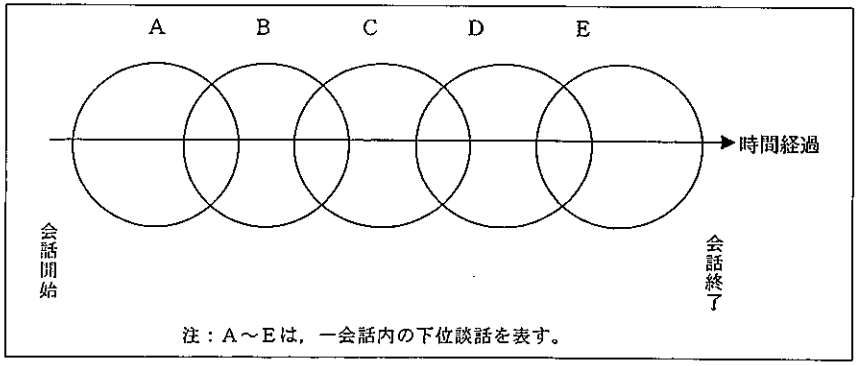


図4　会話における時間経過と下位談話のディスコース・ポライトネスの同定方法

図4は，一会話の開始から終了までの時間経過と下位談話の捉え方を図示したものである。A～Eは下位談話を表すが，その区切り方は，「目的に応じて」，話題ごとにまとめてもよいし，例えば，10分ごとに区切ってみるというように時間で区切ってもよい。例えば，「社会人の初対面の会話」というくらいに大まかに活動の型を捉える場合は，図4のAからEまでの談話すべてを含む会話開始から終了までのすべてを対象として，その会話のディスコース・ポライトネスの基本状態を同定すればよい。仮に，スピーチレベルの場合を例に取ると，すべてのスピーチレベルを分類して集計すれば，その構成比は，同定できる。

しかし，例えば，若い同年代の話者同士の初対面の会話などで，一会話内でも冒頭部と終了部では，言語使用に変化が見られると予測される場合は，下位談話に区切って，下位談話であるA（冒頭部）とE（終了部）のそれぞれのディスコース・ポライトネスの基本状態を同定し，Aの談話内における語用論的ポライトネスは，Aの談話の基本状態からの動きで解釈する。Eの談話内における語用論的ポライトネスも同様に，Eの談話の基本状態からの動きで解釈するのである（必要であれば，B，C，Dも同様に解釈する）。例えば，基本状態の無標スピーチレベルがまだ敬体である会話の冒頭部Aで，「～する？」などの常体が用いられると，それは有標行動となり，「心的距離を縮める」という効果を生むかもしれない。しかし，だんだん打ち解けてきて，既に常体の比率が50%を越えた談話Eで，「～する？」などの常体が用いられても，それはもはや無標行動となっており，特別の効果は生まなくなる，というように解釈していくのである。

以上に説明したように，ディスコース・ポライトネスの基本状態は，一つ一つの会話ごとに，或いは，下位談話ごとにも算出できる。理論的には，このように，各々の会話や談話ごとに，ディスコース・ポライトネスの基本状態を算出した上で，そこからの動きを見ることによって，相手や会話の内容等々によって，同じ個人が同じ言語形式を用いながらも，全く異なる機能を生み出すことができるということについても説明できる。

以上に述べてきたことをまとめると，ディスコース・ポライトネスという捉え方を導入して，発話の効果としての「ポライトネス」を考える手順は，以下のようになる。

(1) 理論的には，個々の会話や談話の，無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態をその都度同定してから，その談話におけるポライトネスを考える。そうすれば，特定の会話や談話における語用論的ポライトネスが，個々の談話の内容・性質の違いや話者の個人差などがあっても，より細やかに解釈・説明できる。

(2) 諸要素の集合体としての談話の，ディスコース・ポライトネスの基本状態を同定することは，ディスコース・ポライトネスにおける各要素の基本状態を同定することでもある（例えば，スピーチレベルの基本状態，あいづちの頻度の基本状態，話者ごとの話題導入頻度の基本状態，依頼を切り出すまでの発話連鎖のパターンの基本状態等々。）。故に，まず，各々の言語文化における代表的な活動の型のディスコース・ポライトネスを構成する主要な要素（スピーチレベル，話題導入頻度，あいづちの頻度，その他）が何であるかを明らかにしていく必要がある。

(3) 具体的手順としては，これまでの例に挙げたように，まずは，主要な活動の型における基本状態を，スピーチレベルなどの各要素ごとに同定していくことが必要である。特定の談話における各要素の基本状態を，異なる言語間で比較していくことも，着手しやすく，また，興味深いところである。これまでには，「社会人の初対面二者間会話」における相手の年齢に応じた「話題導入頻度」，「各スピーチレベルの頻度」，「スピーチレベルシフトの頻度」の「基本状態」などが，ある程度同定されている（宇佐美，1996；1998b；Usami，1999a）。また，未だケーススタディの段階ではあるが，社会人の初対面二者間会話における「冒頭部のあいづちの頻度」と「終結部のあいづちの頻度」の基本状態（宇佐美，1993a），「同僚との雑談における「ね」の使用頻度」と「会議における「ね」の使用頻度」の基本状態（宇佐美，1997b），「日本語，中国語の依頼談話における発話連鎖のパターン」の基本状態（謝，2000），「日本語，韓国語における初対面二者間会話（10代後半－30代前半）におけるスピーチレベルとスピーチレベルシフトの頻度」の基本状態（金　珍娥，2000），「20代日本人の初対面二者間会話」と「20代の日本人とイタリア人の日本語における初対面二者間会話」の基本状態（Olivieri，1999）の傾向も，ある程度明らかになってきている。また，ディスコース・ポライトネスの観点から企図された研究ではないが，日本人同士，日本人と韓国人の初対面である第1回目から，その後4回目までの日本語の会話を縦断的に分析した研究（小柳，2000）も，ディスコース・ポライトネスの基本状態の，回を重ねるに応じた変化を扱ったものとして見ることもできる。

(4) 現実的には，一つ一つの会話やその中の下位談話ごとのディスコース・ポライトネスの基本状態をいちいち同定してから，有標行動の動きを捉える手順を常に厳密に踏むことは，労力がかかる。実際の運用上は，目的に応じてであるが，例えば，先行研究の結果やデータなどから概ね基本状態の傾向の出ている活動の型を利用することなどが考えられる。例えば，「夫婦の会話」については，「常体が無標スピーチレベルである」ことを示しているデータは多い。それらを活用して，「夫婦の会話」では，敬体の使用が有標行動として捉えられるため，先に，夫婦の英語での会話の例としてあげたような「Will you be kind enough to tell me what time it is?（今何時かおっしゃっていただけますでしょうか？）」という発話が，ポライトネスとしてではなく，苛立ちを表す皮肉であると解釈される，というように分析していくこともできよう。

10. ディスコース・ポライトネスの観点から見た敬語の使用と不使用

ここでは，ディスコース・ポライトネスという観点から，日本語の「社会人の初対面二者間会話」を分析した研究（Usami, 1999a）の結果の一部を簡単に紹介しておく。この研究は，日本人社会人の初対面の会話における無標ポライトネス，すなわち，ディスコース・ポライトネスの基本状態における各要素のふるまいを，実証的に同定し，そこから得られた結果に基づいて，Brown & Levinsonのポライトネス理論を検証しようとしたものである。

10. 1. 実験計画

本研究では，主に，相手の属性（いわゆる目上，同等，目下）に関する認知が，話者の言語行動にいかに影響を与えるかを分析する。そのため，Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論において，ポライトネスを規定するとされている三要因，「力関係（Power）」「社会的距離（Distance）」「相手にかける負荷度（Risk of imposition）」のうち，「社会的距離」と「負荷度」については，それぞれ，「初対面の相手であること」，「同様の場面で同様の話題について話してもらうこと」によって条件を一定に保ち，その上で，ベースと対話相手との「力関係」と「性」の要因を変化させた。（本研究では，「力関係」は，年齢と社会的地位の相手からの評定値の合計の高低で見る。以後，便宜上，「年齢が上」などと記することもある。）

具体的には，12名の35歳前後のベースのインフォーマント（女性）に，それぞれ同性の「目上（45歳）」「同等（35歳）」「目下（25歳）」，異性の「目上（45歳）」「同等（35歳）」「目下（25歳）」，の計6通りの相手を割り振り，約15分ずつの会話，合計72

表1　実験計画

一人のベース（35）から見た対話相手（　）内は年齢	Brown & Levinsonの公式における変数		
	力関係（P）	社会的距離（D）	相手にかける負荷度（R）
	年齢・社会的地位	初対面	初対面の会話
年上　女性（45）	＋	＝	＝
年上　男性（45）	＋	＝	＝
同年　女性（35）	＝	＝	＝
同年　男性（35）	＝	＝	＝
年下　女性（25）	－	＝	＝
年下　男性（25）	－	＝	＝

会話を採集した。以下の表1に実験計画を示す。

10. 2. 実験手続き

すべての会話は，名前も含め，互いにほとんど相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。インフォーマントには，特に「話題」は与えず，懇親会などで初めて会った人と話をするようなつもりでできるだけ自然に話すよう，また，この実験自体についてや，実験者との関係等については言及しないよう指示した。実験者が二人を引き合わせた後は，始めの自己紹介の部分から録音するよう伝え，その後実験者は退室した。会話終了後は，フォローアップ・アンケートを行い，すべてのインフォーマントに，①相手の年齢・社会的地位をどう認知したか。②相手が初対面の相手として話しやすかったか否か。③録音を意識せず自然に話すことができたか。④相手の言葉に失礼だと感じたことがあったか等，について，また，会話協力が2回目以上のインフォーマントについては，①〜④に加えて，⑤その会話が初めてではないことが，自分の話し方や話の内容に影響を与えたか（繰り返しの影響）などについて，5段階で評定してもらい，自由記述も求めた。これらを集計，分析した結果，データの妥当性を確認した。（詳細は，Usami（1999a）を参照のこと。）

10. 3. インフォーマント

インフォーマントは，大学卒，有職で共通語話者の女性 延べ48名，男性延べ36名。「ベースの被験者」は女性12名（平均年齢34.8歳），対話相手は，「目上」（平均年齢，女－45.7歳，男－43.8歳），「同等」（女－34.9歳，男－34.5歳），「目下」（女－23.7歳，男－25.5歳）の女男延べ各36名である。

10. 4. 分析方法

スピーチレベル

Basic Transcription System for Japanese（BTSJ）（宇佐美，1997a）によって文字化の後，全有効発話文（7327）のスピーチレベルを，大きくは，以下の2つの観点からコーディングした。

① 「文中」に尊敬語，謙譲語等が含まれるかどうか（文中POL）ー話者自身の言葉遣いの特徴の指標となると予測。

② 「文末」が敬体か常体か（文末POL）ー対話相手への配慮，心的距離の調節，待遇の指標となると予測。

つまり，尊敬語・謙譲語などの選択と，敬体と常体の選択（以下の4通りの発話）が区別できるようにコーディングした。というのは，それぞれが，ディスコース・ポライトネスの要素となっており，異なる機能を果たしていると予測するからである。

1　いらっしゃるんですか？　　尊敬語・敬体
2　いらっしゃるの？　　尊敬語・常体
3　行くんですか？　　普通動詞・敬体
4　行くの？　　普通動詞・常体

また，文中POL，文末POLともに，「丁寧度を示すマーカーなし」(NM)の分類を設けてある。

スピーチレベルシフト

「スピーチレベルシフト」は，文末スピーチレベルに「常体」が表れたところに着目し，その前後のシフト関係を，直前の発話が相手か自分かという観点も含めてコーディングした（直前シフト）。直前の発話が「自分」の場合は，その前の「相手」の発話からのシフトの有無も見る（直前前シフト）。同様に直前の発話が「相手」の場合は，その前の「自分」の発話からのシフトの有無も見る（直前前シフト）。(図5で例を参照のこと）。

DI…Down-shift from Interlocutor　　DS…Down-shift from Self
UI…Up-shift from Interlocutor　　US…Up-shift from Self
NS…No-shift from Interlocutor　　NS…No-shift from Self

以下の図5に，BTSJによる文字化とコーディングの例を示す。(BTSJの文字化法の原則の詳細は，宇佐美（1997a）を参照のこと。図5において，文中POL，文末POL，直前シフト，直前前シフト以外のコーディングは本稿に直接関係はない。)

レコードNo	発話文No	発話終了	話者	発話内容	文中POL	文末POL	機能POL	文末情報	直前シフト	直前前シフト	機直前シフト	機直前前シフト
18	18	*	SM01	えー，前ちょっとねえ，（ええ）あのー，学校の方にコンピュータのあのー，機械をですね，（ああ）納品する仕事をやったことがありましてね。	P	P	P	C				
19	19	*	BF01	えーえーえー。	NM	NM	P	C				
20	20	*	SM01	何とか文理大学っていうかなあー。	N	N	N	C	DI	DS	DI	DS
21	21	*	BF01	あー。	NM	NM	P	C	UI	NS	UI	NS
22	22		BF01	/少し間/なんかでもすごい田舎で，小学生の時だったんですけど，（ええ）カルチャーギャップがすごいあってー，								
23	23	*	SM01	あっ，そうですか。	P	P	P	C				
24	22	*	BF01	えー，びっくりしましたよ。	P	P	P	C				

図5　BTSJによる文字化，コーディングの例

10.5. ディスコース・ポライトネスという観点から見た文レベルにおける言語形式の選択の傾向

以下の図6，図7に，文中のスピーチレベル，文末のスピーチレベルの結果を示す。本稿では，細かい結果や考察は示せないので，興味のある方は，Usami（1999a）か，その結果の一部をまとめた宇佐美（2001）を参照されたい。

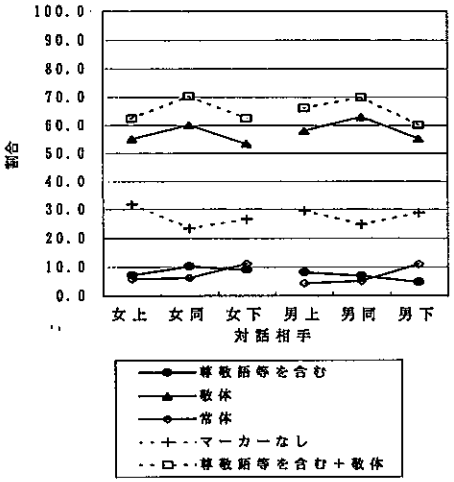


図6　総発話文数に占める各文中スピーチレベルの割合の平均値
(ベース側からの結果)

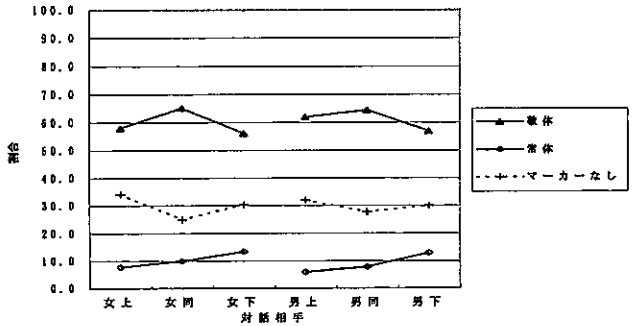


図7　総発話文数に占める各文末スピーチレベルの割合の平均値
(ベース側からの結果)

スピーチレベルの結果の概略

尊敬語等の使用・不使用と文末が敬体か常体かを明確に分けてコーディングし，分析することによって明らかになった結果を総合的に捉えてまとめると，以下のようになる。(本稿では，すべての結果を提示したわけではないことをお断りしておく。)

① 常体を含む発話のみが，対話相手との力関係（年齢，社会的地位）を顕著に反映している。つまり，初対面の会話においては，目上の人により多く敬語を使うのではなく，目下の人により多く常体を使うという傾向のほうが顕著であるということである。別の言い方をすれば，話者間の「力関係」をより顕著に反映しているのは，尊敬語等の使用ではなく，常体の使用のほうであると言える。これは，初対面の会話というディスコースにおいては，常体を使うことが有標行動となっているからだと考えられる。ただし，常体の使用は，その場を和らげるために冗談を言ったり，相手に対する共感や親しみを表すというようなポジティブ・ポライトネスの機能も持ったものが多く，そのほとんどが，上下関係を明確にするぞんざいな言葉遣いというものではないというところに注目する必要がある。

② 本研究の条件下では，年齢・社会的地位の評定結果に男女差がなかったにもかかわらず，女性のほうが男性より，尊敬語等を含む発話を有意に多く用いていた。また，女性話者同士を比較すると，目下にあたる女性話者の尊敬語等の使用が最も低かった。特に，最後の結果は，尊敬語の使用が相手への待遇を表すものだということを前提にすると，B＆Lの理論の予測，敬語使用の原則双方に反するものである。しかし，本研究の結果から，初対面の会話における尊敬語等の使用は，今日では，対話相手に対する待遇より，むしろ，話者個人の属性や，話者がアイデンティティーを帰属させている社会的集団に特徴的な言葉遣いなどのスタイルを指標する傾向のほうが強くなってきていると考えられる。また，目下に当たるインフォーマントの尊敬語等を含む発話の使用が相対的に少ないという結果は，今後，初対面の会話において，尊敬語等を含む発話の割合が徐々に減少していくであろうことを予測させる。

10. 6. 談話行動としてのスピーチレベルシフト

次に，ディスコース・ポライトネスの各要素の機能を，よりダイナミックに捉えるために，スピーチレベルのシフト操作を分析した。以下の図8に，ベースの総発話文数に占める各スピーチレベルシフトの割合の平均値を示す。(図8では，いずれも，対話相手の発話からのシフトと自分の発話からのシフトの合計を示すのみに留めている。)

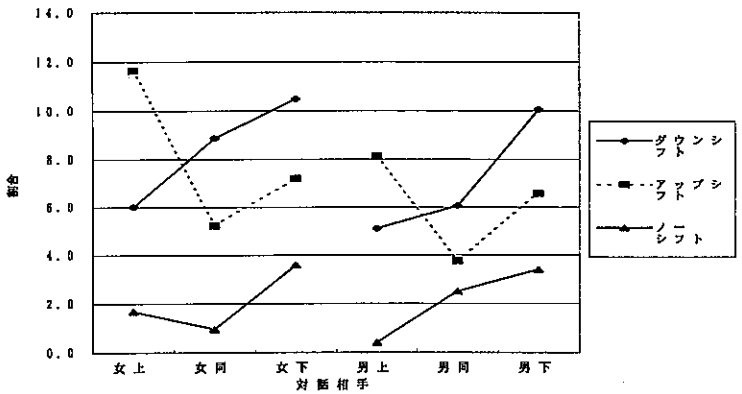


図8　総発話文数に占める各文末スピーチレベルシフトの割合の平均値
(ベース側からの結果)

スピーチレベルシフトの結果の概略

① ダウンシフトの割合は，対話相手の年齢，社会的地位と，ほぼ反比例しており，対話相手との力関係を顕著に反映している。

② アップシフトの割合は，対話相手の発話からのシフトか，自分の発話からのシフトかによって，異なる傾向を示している。(ただし，図8のアップシフトの結果は，対話相手と自分の発話双方からのアップシフトを合計したもので，以下に記述する傾向を反映していない。) 相手の発話からのアップシフトは，対話相手の年齢，社会的地位と，ほぼ比例しているが，自分の発話からのアップシフトは，対話相手の年齢，社会的地位と，むしろ反比例する傾向を示した。これは，ダウンシフトが多かった目上の話者が，自らスピーチレベルを基本状態に戻していることを示唆している。つまり，グローバルな観点から見ると，すべての話者が，ローカルな要因の影響でダウンシフトされたスピーチレベルを，基本状態に戻そうとしている行動傾向が読み取れたのである。

従来，ローカルな観点からの分析において，ダウンシフトは，心的距離の短縮など，ポジティブ・ポライトネスとして用いられることが多いことや，アップシフトには，話題の転換をマークする機能があることなどが報告されている（宇佐美，1995)。しかし，グローバルな観点からの分析を加えることによって，ポジティブ・ポライトネスとしてのダウンシフトは，目上には使いにくく，目下には使いやすいこと，アップシフトに関しては，目下の話者が，対話相手が一旦下げたスピーチレベルを基本状態に戻す割合が高いが，目上の話者も，一旦自分で下げたスピーチレベルを元に戻そうとしていること

等，ディスコース・ポライトネスを構成する要素の，より細やかな機能が明らかになった。

10.7. ディスコース・ポライトネスにおける諸要素の働き

以上の結果に表れたように，言語行動の諸要素の中には，Brown & Levinsonの理論で言う「相対的力（P）」がより顕著に反映されるもの，「社会的距離（D)」が顕著に反映されるもの，「相手にかける負荷度を示す場面や状況（R)」が優先的に反映されるものがあり，それぞれの要素がそれぞれの役割を果たしていることが分かる。特定の談話のポライトネスは，それら諸要素の機能の総体として捉えられるのである。

これまで扱ったものの中では，「話題導入頻度」や「相手の発話からのアップシフト」は，話者間の「相対的力関係（P)」を指標し，「スピーチレベルのダウンシフト」は，冗談を言うなどの発話の内容に応じて，談話内におけるローカルな「心理的距離」[14]を操作するのに用いられる一方，「言語形式としてのスピーチレベル（敬体／常体）の選択」自体は，相手への待遇を表すというよりは，むしろ，「初対面の相手との会話では，敬体を使う」などの，その談話の場面や状況（R）におけるディスコース・ポライトネスの基本状態における無標形を主に指標することなどが明らかになった。

このように考えると，従来の敬語研究のように，「言語形式の丁寧度」のみを扱っていたのでは，Brown & Levinsonの理論が志向した「言語使用が生み出す実質的な機能としてのポライトネス」は捉えられないし，ましてや，談話レベルのポライトネスを扱うことはできないことがわかるだろう。これらの結果の考察を通して，先に定義した「ディスコース・ポライトネス」という概念が必要であると考えるに至った。つまり，あるまとまりを持った「会話」などにおける，人間の相互作用に重点を置いた実質的機能としてのポライトネスは，文レベルにおける言語形式の丁寧度からだけではなく，談話レベルでしか捉えられないその他の諸要素がポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体として捉えられる必要があるということである。

本稿では十分に論じられなかったが，「ディスコース・ポライトネス」という捉え方で自然会話分析を進めることによって，これまで主に，DCT（Discourse Completion Test）などの質問紙調査によってBrown & Levinsonの理論を検証しようとした，発話行為レベルの有標ポライトネスについての諸研究の結果に，ばらつきがあったことの解釈や説明もある程度可能になる。というのも，ディスコース・ポライトネスの観点から分析してきた一連の研究結果によると（宇佐美，1993b，1997b；1998c；2001；Usami，1994，1999a等），ディスコース・ポライトネスの各要素は，異なる振るまいをすることが明らかになっているのであるから，そのうちの一，二の要素の振るまいの結果に違いがあって当然だと考えられるのである。

この項で見てきたように，例えば，社会人の初対面二者間の会話においては，話題導入，常体の使用，スピーチレベルのダウンシフト，相手の発話からのスピーチレベルのアップシフトの頻度などは，Brown & Levinsonの理論で言う「相対的力関係（P)」を顕著に反映しているが，敬体の使用頻度は，むしろ，「社会的距離（D)」や「相手にかける負荷度を規定する場面や状況（R)」をより反映し，尊敬語や謙譲語の使用は，相手への待遇よりも，むしろ話者個人のスタイル（いわゆる丁寧な話し方をする人やそれほどでもない人等）を指標していたのである。

このような結果を考えると，例えば，「敬語を有する言語におけるスピーチレベルの選択」や一発話行為である「依頼行為」など，ディスコース・ポライトネスにおける一，二の要素のみを取り上げて分析した結果からだけでは，本質的にダイナミックなBrown & Levinsonの理論の全体については言うまでもなく，その一部である「Wx＝D(S,H)＋P(H,S)＋Rx」の公式の妥当性についてさえも，十分に検証したとは言い難い。ディスコース・ポライトネスにおける各要素の振るまいと，それがポライトネスを規定するとされている三要因である「力関係」「社会的距離」「相手にかける負荷度の重みづけ」のうちのどの要因の影響を反映しているかは，それぞれ異なるからである。

しかし，見方を変えれば，Brown & Levinsonの理論自体が，「発話行為レベルの有標ポライトネス」のみを対象とすることによって，様々な言語における種々の発話行為を対象にして彼らの理論を検証しようとする諸研究を誘発すると同時に，普遍的であるという自らの主張にもかかわらず，決して少なくない相反する結果を生じさせたと考えることもできるだろう。つまり，発話行為レベルのみでポライトネスを扱うことの限界を露呈させるような諸研究を，Brown & Levinson自らが誘発したとも言えるのである。

11. ポライトネスの談話理論構想の概略

以上に述べたような問題点を克服し，より普遍的なポライトネス理論を確立するためには，これまでに説明してきた「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し，談話レベルでポライトネスを捉えると同時に，無標ポライトネスというものもポライトネス理論に取り込んでいく必要がある。無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態からの離脱や回帰という「動き」が，発話効果としてのポライトネスを生むという「相対的ポライトネス」を対象としない限り，真に文化的にバイアスのない「ポライトネスの普遍理論」を確立するのは困難であると考えるからである。

しかし，発話効果としてのポライトネスを具体的に予測し，解釈・説明するためには，無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態からの離脱や回帰という「有標行動」の「発話内容」が，相手に共感を示すものなのか，相手の非を指摘するものなのか，もしくは相手にけんかを売るようなものなのか，或いは，単にその発話を強調したいだけなのか等々，発話の内容や意図についても考慮する必要がある。すな

わち，ポライトネスの談話理論は，大きくは以下の5つの側面から構成される。

(1) 無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態を同定した上で，何が有標行動であるかを相対的な視点から明らかにするという側面
(2) 「発話内容」の扱い方と位置づけを明確にするという側面
(3) 有標行動を同定した後，その有標行動が，①プラス・ポライトネス効果，②言語的談話効果，③マイナス・ポライトネス効果，のうち，どの機能・効果を生み出すかについて，予測・同定するプロセスを体系化するという側面
(4) 有標行動の効果としての有標ポライトネスを体系的に順序づけるという側面
(5) いくつかの発話連鎖が生むポライトネスの機能を，より大きいディスコース・ポライトネスの中で位置づけ，体系化するという側面

筆者が，「主に，話し手に焦点を当てた発話行為レベルの有標ポライトネスの理論」であると位置づけたBrown & Levinsonのポライトネス理論のうち，「相手のフェイス侵害度（FT度）を見積もる公式」は，基本的には，この(4)の部分には，有効なのではないかと考えている。しかし，有標行動の発話内容や発話意図をも考慮して，ポライトネスの談話理論をより具体化する際には，以下のような課題がある。それは，Brown & Levinsonのポライトネス理論の問題点のところでも言及したように，一つの同じ有標行動が，「プラス・ポライトネス（有標ポライトネス）」と受け取られるか，「失礼・不愉快というマイナス・ポライトネス（有標ポライトネス）」と受け取られるか，または，「単なる発話内容の強調（無標ポライトネス）」などと捉えられるかは，聞き手の解釈によって違ってくる場合も多いということや，話し手のフェイス侵害度の見積もりが，聞き手のそれと一致しないという，現実生活ではよくあることを，いかに理論に組み込んでいくかという点である。このような人間の「相互作用」という観点もより明確に組み込んだ，よりダイナミックなポライトネスの談話理論を構築し，さらにそれを「対人コミュニケーション理論」に発展させていくためには，聞き手の解釈過程に焦点を当てた「関連性理論」のような捉え方も取り入れていく必要があるのではないかと，今のところ考えている。ただ，ここでは，以下の図9に，ポライトネスの談話理論の対象と機能同定のプロセスを簡単にまとめておくに留める。図9－1には，一発話行為レベルの有標行動とその機能の同定についてまとめた。図9－2は，例えば，依頼を切り出すまでの発話連鎖のパターンなど，発話連鎖レベル，つまり，談話レベルの有標行動とその機能の同定についても，考え方は同様であることを示すためのものである。

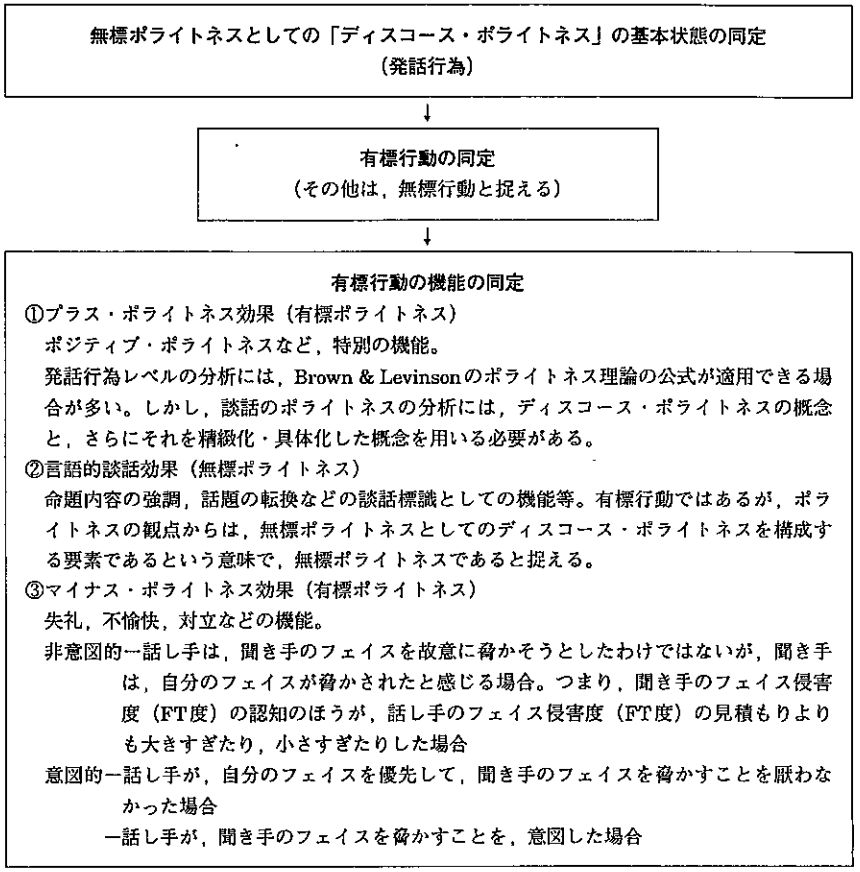


図9－1　ポライトネスの談話理論の対象と機能同定のプロセス（発話行為）

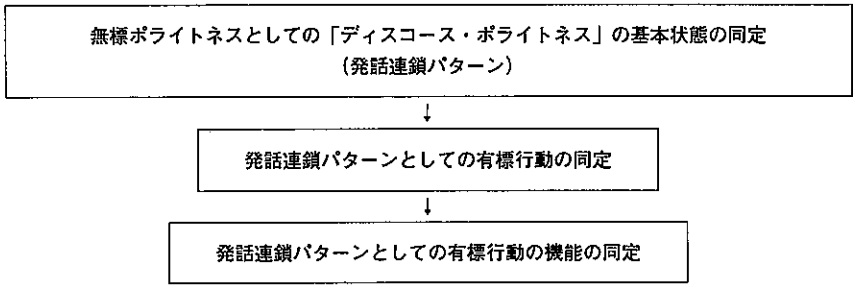


図9－2　ポライトネスの談話理論の対象と機能同定のプロセス（発話連鎖パターン）

12. ポライトネスの談話理論確立に向けて

今後は，まず，諸言語において，ディスコース・ポライトネスを構成する主な要素が何であるかを同定し，それぞれの要素の「基本状態」を比較検討していく必要がある。ディスコース・ポライトネスの要素が何であるかは，当然，各々の言語によって異なる。また，同じ要素（例えば，あいづちの頻度等），或いは，同様の要素（例えば，日本語と韓国語における尊敬語や謙譲語の使用等）であっても，それらのディスコース・ポライトネスの「基本状態」は，各言語文化によって異なるだろう。故に，様々な言語・文化においてディスコース・ポライトネスを構成する諸要素を比較・検討し，各言語における大まかな「活動の型」ごとの「無標ポライトネス」としての「ディスコース・ポライトネスの基本状態」を同定していくことは，様々な言語・文化における言語行動のパターンの類型を明らかにし，再考することにもつながる。しかし，同時に，ディスコース・ポライトネスという概念を導入し，語用論的ポライトネスを，有標行動という「動き」が生み出す有標ポライトネスと，主に無標行動によって構成される無標ポライトネスに分けて考えていくことによって，各言語の文法構造や特徴の違いの影響を最小限に留めながら，諸言語の「ポライトネス効果」を生み出すメカニズムを統一的に説明することも可能になるだろう。

例えば，ケーススタディではあるが，金珍娥（2000）は，日本語と韓国語の初対面二者間会話（20代中心）における，スピーチレベルとスピーチレベルシフトの対照研究において，尊敬語・謙譲語の類の使用率は，厳密には，対話相手の年齢にもよるが，概ね，日本語では，全発話文数の10%未満，韓国語では30%前後と，韓国語のほうが日本語より，その使用率が高かったことを結果の一部として報告している。この結果も，ディスコース・ポライトネスの観点から解釈すると，初対面の会話における両言語の無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスにおけるスピーチレベルの基本状態が異なるということを表していると捉えられる。つまり，尊敬語・謙譲語の絶対的使用率の高さのみによって，韓国語話者のほうが日本語話者よりポライトだ，とは結論づけられない。発話行為が生み出す効果としての「実質的ポライトネス」は，その基本状態からの動きで捉える必要があるからである。つまり，このような基本状態が同定されている場合，理論的には，日本語では，10%を超えて尊敬語や謙譲語を使用することによって，有標ポライトネス（例えば，普通以上の丁寧さ）やその他の効果を生み出すことができるが，韓国語においては，そのような有標ポライトネス効果やその他の機能を生み出すためには，30%を超える尊敬語や謙譲語を用いる必要があるということが予測できる。つまり，韓国語において，日本語と同じような語用論的効果を生み出すためには，日本語よりも相対的に多くの尊敬語や謙譲語を用いる必要があると予測できるということである。

また，特定の発話行為やその連鎖の文化比較に関する研究や，例えば，西尾（1998）が「マイナス待遇表現行動」と命名した枠で扱っている研究などのように，これまでディスコース・ポライトネスという観点とは異なる観点や興味からなされてきた研究における結果も，ディスコース・ポライトネスという観点から再解釈し，ポライトネスの談話理論に組み込んでいくことが可能である。例えば，西尾（1998）は，「相手への配慮を含めた微妙なマイナス評価の表明」も考察するために「マイナス待遇表現行動」と命名したとし，その枠で興味深い題材を扱っているが，筆者は，そこで扱われているような発話行為についても，ポライトネス理論，及び，ポライトネスの談話理論で，統一的に説明できると考えている。例えば，「相手の非に言及する」というような行為をポライトネス理論で解釈すると，行為自体は，フェイス侵害度（FT度）が非常に高く，絶対的な意味では，ポライトではあり得ないが，しかし，だからこそ，Brown & Levinsonの理論で言うFTAを行わない，すなわち，相手の非には触れないというストラテジーを取るのが，相手のフェイスを最も配慮した最もポライトなストラテジーとなるのである。しかし，様々な状況から，どうしても，「相手の非に言及する」という発話行為を行わざるを得ない場合，或いは，行いたい場合にはどうするか。相手との力関係（P），社会的距離（D）などに応じて，相手の非を「ほのめかす（オフ・レコード）」を始め，いくつかあるストラテジーの中から，適当と判断したストラテジーを選択するというのが，Brown & Levinsonの理論である。すなわち，相手のフェイスをなるべく脅かさないように相手の非に言及するために，なんらかのストラテジーを取るのであれば，それは，フェイス侵害度（FT度）の軽減行為であり，ポライトネス・ストラテジーの一種であると捉えられる。つまり，「ポライトに，相手の非に言及する」のである。そういう意味で，筆者は，特に，相手が大幅に遅れてきた場合や，約束を守らなかった場合などのように，相手の非が明白な場合などには，「相手の非に言及する」という行為自体を，「マイナス待遇」表現行動とは捉えない。それは，むしろ，相手の行為に応じた正当な待遇と言ってもよいかもしれないからである（「マイナス待遇」という言葉をどう捉えるかの違いでもあるが…。）。

しかし，ここでより重要な観点は，「あえて相手のフェイスを脅かすために，相手の非に言及する」場合を考慮する必要があるという点である。この点は，相手のフェイスを保持するという観点から構築されたBrown & Levinsonのポライトネス理論が十分に扱っていない点であり，ポライトネスの談話理論をより具体化するための課題の一つである。筆者は，このような「故意に相手のフェイスを脅かすような発話行為」をすることも，図9－1に示したように，「意図的マイナス・ポライトネス」として，ポライトネスの談話理論の中で統一的に扱えると考えている。「意図的マイナス・ポライトネス」とは，すなわち，従来，「罵倒・罵り表現」などと呼ばれてきたものにも通じるが，また，故意に，慇懃無礼になる場合も含まれる。これらの体系化も，今後の課題である。

13. ポライトネスの談話理論とその応用

ディスコース・ポライトネスという概念を導入した「ポライトネスの談話理論」構築への模索は，緒についたばかりであり，今後の課題は多い。しかし，少なくともディスコース・ポライトネスという概念を導入することによって，これまで文化の相対性という観点に重きがおかれていた発話行為の文化差に関する研究も，異なる観点から捉え直すことが可能になる。すなわち，特定の発話行為について，文化による違いが明らかにされてきた研究も，ディスコース・ポライトネスの観点から見ると，例えば，「依頼」や「断り」における発話連鎖のパターンが文化によって異なること，すなわち，「依頼談話」や「断り談話」のディスコース・ポライトネスの「基本状態」が，各々異なる言語・文化ごとに，同定された研究とみなすことができる。それらの結果を文化差の記述のみに留めるのではなく，その基本状態からの動きが生み出すポライトネスという観点から再考することによって，各文化における，各談話の無標ポライトネスとしての基本状態が異なるという事実から生み出されている，異文化間コミュニケーションにおける誤解やミス・コミュニケーションの原因解明につなげることもできる。

例えば，謝（2000）は，授業関連のプリントやノートを借りることを依頼する「依頼談話」について，談話完成テストと実際の依頼談話の録音データ双方に基づいた日中比較研究を行っているが，その中で，談話完成テストでは，発話レベルの回答が多く，日中に差はなかったが，依頼談話の録音データの分析結果からは，日本語談話では，「依頼ストラテジー（実際に借りたいと依頼する発話）」が切り出されるまでに，「注意喚起（呼びかけ等）」「見込みの確認（授業に出たかどうかの確認等）」「補助ストラテジー（プリントをなくしてしまった等の状況説明等）」を経ることが多いが，中国語談話では，「注意喚起」の後，すぐに「依頼ストラテジー」に移るという異なるパターンが見られたことを報告している。

このような結果を，ディスコース・ポライトネスの観点から解釈すると，日本語と中国語では，「依頼談話」の無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態が異なると捉えられる。つまり，日本語の「授業のプリントやノートを借りるような依頼談話」においては，「依頼ストラテジー」が切り出されるまでに，「注意喚起」「見込みの確認」「補助ストラテジー」という発話連鎖を経ることが無標ポライトネスになっているが，中国語においては，「注意喚起」の後，すぐに「依頼ストラテジー」に移ることが，無標ポライトネスになっていると考えられる。つまり，中国語においては，それで十分ポライトだと捉えられるということである。

このような結果を踏まえると，もし仮に，中国語を第一言語とする日本語学習者が，「日本語における依頼談話」において，「注意喚起」の後，すぐに「依頼ストラテジー」

に移るという中国語の無標ポライトネスである発話連鎖を，日本語に転移させた場合，日本人は，それを，唐突だとか，失礼だというように感じてしまうかもしれない。このような感じ方は，一発話レベルで見た依頼発話自体の言語形式の丁寧度が十分適切であった場合にも起こり得ることである。一方，中国語において，日本式の長い発話連鎖を伴う依頼の仕方をしたら，それは，中国語においては有標行動となり，よそよそしいと感じられたり，何か他意があるのではないかと勘ぐられたりするかもしれない。

このように，「依頼の発話連鎖」というような特定の談話のディスコース・ポライトネスの基本状態は，各々の言語・文化によって異なるということを十分考慮に入れて，母語話者と非母語話者の相互作用を分析していくことによって，単に敬語の使い方を間違えているというような文レベルの現象を超えてある，「談話のポライトネス」の異文化間ミス・コミュニケーションの原因解明にもつなげていき，より円滑な異文化間コミュニケーションの確立に役立てることもできると考えている。

14. おわりに

以上，文レベルの言語形式の丁寧度の選択に語用論的制約がある敬語を有する言語と，「社会言語学的規範，慣習に則った言語使用」が言語形式に表れにくく，話者の自発的ストラテジーが目立つ，敬語を有さない英語のような言語における言語使用の「実質的ポライトネス」を，同じ枠内で比較・検討し，そのポライトネス効果を生み出す普遍的原理を追究するためには，「ディスコース・ポライトネス」という概念を導入し，これまでのポライトネス理論を，談話レベルから見た「相対的ポライトネス」，「無標ポライトネス」をも扱う「ポライトネスの談話理論」へと発展させる必要があるということを論じてきた。

様々な活動の型の談話における，無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態を同定していくことは，一見，「談話レベルにおける社会言語学的規範や慣習に則した言語使用」の実態を明らかにしようとしているように見えるかもしれない。しかし，その目的は，規範の標本を作ることではなく，あくまで，規範（ディスコース・ポライトネスの基本状態）からの離脱や回帰という「動き」に焦点を当て，その「基本状態」との関係から「相対的ポライトネス」を捉えていくためのものである。

トマス（1998）も強調するように，各言語文化における「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」の標本を作ることは，社会言語学的には意義があるかもしれないが，「語用論」の興味の対象とはならない。語用論，或いは，言語社会心理学の主関心の一つは，むしろ，「人は，なぜ，何の目的で，社会言語学的規範や慣習に則した言語使用を破ることがあるのか」ということだからである。

人は，特別にポライトになりたい場合は，社会言語学的規範を超えたポライトネスの

表現をするだろう。また，人は，相手を怒らせるために，社会言語学的規範を破ることもある。逆に，自らの怒りを表すために，社会言語学的規範を破ることもあるだろう。ポライトネスの談話理論が，そうした人間の心理を反映した言語行動のメカニズムに迫ることができれば，それは，おのずと，「対人コミュニケーション理論」へと発展していくことになる。そもそも「談話のポライトネス」を考えるということは，単なる発話行為レベルの「言語表現の丁寧さ」の問題を超えた，円滑な人間関係を確立・維持・強化するための言語使用を考えることであった。

ディスコース・ポライトネスという概念を導入した「ポライトネスの談話理論」をより具体化し，体系化していくためには，未だ解決しなければならない課題は多い。しかし，その課題は，これからの「語用論研究」全体の課題と共通しているようにも思える。すなわち，「相互作用」，「ダイナミクス」，「相対性」という「動き」を，いかに体系化していくことができるかという課題である。

<謝辞>本シンポジウムの企画者である吉岡泰夫氏には，シンポジウムの準備段階から原稿提出までの間，いろいろな意味で大変お世話になりました。ここに記して，心より御礼申し上げます。

注：

1）本稿は，1999年12月4日に行われた『第7回国立国語研究所国際シンポジウム，第4専門部会「談話のポライトネス」』において発表した「談話のポライトネス－『ディスコース・ポライトネス（DP）』という捉え方－」の内容に加筆・修正を施したものである。これまでの幾つかの拙稿での論点を総合的に捉え直し，改めてまとめたものでもあるため，文脈や必要性に応じ，一部，これまでの拙稿における記述と重なる部分もあることをお断りしておきたい。また，有益なコメントを下さった方々に感謝したい。

2）Brown & Levinsonの“politeness theory”における“politeness”の専門用語としての意味は，英語においても一般的な意味とは異なるものである。また，日本語においても，「丁寧さ」と訳すと「言語形式の丁寧度」と混同されやすく，Brown & Levinsonの言う“politeness”の正確な概念を表しているとは言えなくなる。そのため，筆者はこれまで，“politeness”と原文で表記することによって，それがBrown & Levinsonの“politeness”の概念を指すことを示してきた。しかし，最近，日本においても，Brown & Levinsonの理論が知られるようになり，片仮名表記もよく使われるようになったことを鑑み，本稿では，Brown & Levinsonの定義する“politeness”を「ポライトネス」と表すことにした。また，本文でも説明するように，“politeness”及び，“politeness theory”に対する異なる立場やアプローチ全般に言及する際など，“politeness”をより広義に捉える際にも，「ポライトネス」を用いる。

3）ここで，“politeness”をあえて「丁寧さ」としているのは，“politeness”が，Brown & Levinsonの定義するような意味ではなく，従来から意味されることの多かった「礼儀正しさ」等に近い意味で用いられているものを表しているからである。

4）“redress”という用語の訳についても，「軽減」「緩和」「補償」等，いくつか考えられる。筆者は，これまで，Brown & Levinsonの理論の中では，ポライトネス・ストラテジーが，相手のフェイスを脅かす行為（FTA）を「埋め合わせる」ためのものとして捉えられているというニュアンスに重きを置いて，「補償」という訳語を用いていた（宇佐美，1998c等）。しかし，この理論が，これまでのポライトネスへの直観的アプローチと異なる最も重要な側面の一つである，相手のフェイスを脅かす度合い，すなわち，フェイス侵害度（FT度）の重み（Wx）が，「Wx＝D(S, H)＋P(H, S)＋Rx」という公式に基づいて見積もられ，その度合いに応じた言語行動が選択されるという，「相手のフェイス侵害度の見積もりの算出」を基本にしているという側面を前面に打ち出すには，より操作的なニュアンスのある「軽減」のほうが適当であると考えるようになった。故に，以後，“redress”の訳語には，「軽減」を用いることにする。

これに関しては，Brown & Levinson（1987）の原文の書き方自体が紛らわしいということもある。例えば，原文では，“redress the FTA”というように，「フェイスを脅かす行為（FTA）」を「redress（補償，緩和する）」というような書き方もなされているが，より厳密には，フェイスを脅かす「行為（FTA）」を「redress（補償・緩和する）」のではなく，フェイスを脅かす「度合い（フェイス侵害度，FT度）」を「redress（軽減する）」ために，ポライトネス・ストラテジーを用いるというほうが，Brown & Levinsonの理論の基本である「フェイス侵害度を見積もる公式」の存在意義がより明確になり，正確だからである。そう捉えると，これまで，「FTAの度合い」の見積もりの公式と呼んでいたものも，「フェイス侵害度（FTの度合い）」の見積もりの公式とするほうが妥当であると考える。よって，以後「フェイス侵害度」「FT度」という用語を用いる。

5）しかし，現在，Fraser自身，このようなアプローチをあまり評価していないようであり，後述するように，Fraser（1990）では，「会話の契約（conversational contract）」という新しい捉え方を提出している。

6）ここでは，日常生活におけるあたりさわりのない会話を，「一見，フェイスを脅かすとは思われないような言語行動」としておいたが，筆者は，基本的には，すべての発話は，フェイスを脅かす可能性を持っているという立場を取る。例えば，「今日は，土曜日です」という発話は，一見，フェイスを脅かすとは思えない発話であるが，例えば，何かの締め切りが金曜日だったというコンテクストにおいては，十分，FTAになり得る。つまり，すべての発話には，それがなされるコンテクストというものがある以上，すべての発話はFTAになり得ると考えるのである。

7）Brown & Levinsonの理論へのいくつかの批判自体の妥当性を検証したものに，宇佐美（1998c），Usami（1999a）がある。

8）「フェイス」については，「面子」，「面目」，「顔」などと訳されることも多いが，それらの訳語が，Brown & Levinsonの言う操作的に定義された「フェイス」を，「文化に固有の概念」と混同して捉える誤解を強めているように思われるので（宇佐美，1998c），ここでは，あ

えて「フェイス」を用いることにする。また，「ポジティブ」「ネガティブ」という用語についても，これまで「積極的」「消極的」という訳語が使われることが多かったが，その訳語のニュアンスによって，Brown & Levinsonが定義した意味が誤解されやすくなっている面もあるように思われるため，ここでは，原語を片仮名表記することにした。「ネガティブ」が「否定的な」という意味ではないことは言うまでもない。本文にも記したように，人と人とのかかわり合いにおける，人間のプラス方向への欲求が「ポジティブ・フェイス」であり，マイナス方向に関わる欲求が「ネガティブ・フェイス」であるというくらいの捉え方が妥当であろう。読みづらい面もあるかもしれないことを，お断りしておく。

9）数学的な意味を持つものではない。

10）この「相対的力（power）」は，あくまで当該の状況において，聞き手が話し手に対して持つ「相対的力」を指すものであり，「権力」「勢力」などのような社会学的に規定される概念ではない。この点に関しても，誤解が多いようなので，注記しておく。より詳しい説明は，Brown & Levinson（1987），宇佐美（1994c）などを参照されたい。

11）例えば，「上下」という要因の中には，「年齢の上下」や「社会的地位の上下」などがあると考えられるが，これらが「総合的に」判断されて，「力関係」の要因として集約され，さらに，相手との社会的・心理的距離（D）や状況（R）も加えて，フェイス侵害度（FT度）が総合的に見積もられる，というように考える。そうすれば，年下の上司に話す場合などのように，「年齢の上下」と「社会的地位の上下」が一致していない場合など，発話時の状況や個人の判断などによって多少のずれが生じる可能性のある場合についてまで，なんらかの一般化をするために，「年齢の上下と社会的地位の上下のどちらを優先して言語行動が決められるのか」というようなことを択一的に同定する必要もなくなる。

12）本稿で言う「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」とは，すべての言語社会に存在する，文字通り，規範的，慣習的な言語使用のことである。日本語においても特に敬語使用だけに限らず，「親しい仲間とは常体で話す（ものだ）」というようなことも含んでいる。また，英語でも同様に，例えば，「改まった場面では，フォーマリティの高い語彙を選ぶ」とか，「くだけた場面では，スラング（俗語）を多く用いる（のが普通だ）」というような規範や慣習に即した言語行動のことを指す。一方，「話者個人の方略的な言語使用」とは，敬語を有する言語，そうでない言語にかかわらず，基本的には，Brown & Levinsonの定義するポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスに配慮した各個人の自発的な言語行動のことを指す。例えば，日本語では，敬体が無標形である会話において，親しみを表すために，時々，常体を用いること（ダウンシフト）や，相手の話に興味を持っていることを示すためにあいづちを頻繁に打つなどの言語行動を，「方略的言語使用」と捉える。このように，「話者個人の方略的言語使用」には，スピーチレベルシフトやあいづちの頻度などのような無意識的な言語行動も含む。

シンポジウム当日，「社会的規範に則った言語使用」，「個人の方略的な言語使用」が，井出（1986等）の「わきまえ方式」「働きかけ方式」と，どう違うのかという質問が出たこともあるので，ここで簡単にまとめておく。Ide（1989）などでは，「わきまえによる言語使用」も「個人の方略的言語使用」も，どの言語にもあり，両者の比重が異なるので

あるとしているものの，一方で，本人の説明においては，日本語における「わきまえの言語使用」とは，ほとんどが「敬語使用の原則に則った言語使用」のことを指している。また，Ide（1989）の説明においては，「日本語においては，この『わきまえの言語使用』，すなわち敬語使用の原則の語用論的制約が強いため，英語などのように，『個人の方略的言語使用』が遂行される余地がほとんどない」と述べられており，彼女の言う「わきまえの言語使用」は，本稿で言う，個人の方略的な言語使用と共存し得るものとしての「社会言語学的規範，慣習に即した言語使用」よりも，より狭義のものであるように思われる。そういう意味で，筆者は，主に，日本語・日本文化に固有の敬語使用の原則をもとに説明し，どこか日本文化に特有の言語行動であるかのような印象を与えかねない「わきまえ」（Ide，1989等）という用語は，どの文化・社会にも当てはまるものとしての「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」のことを表す用語としては，適切ではないと考えている。なぜならば，「わきまえ」という用語が，背後にある日本文化，日本的価値観を反映した「敬語使用の原則」に即した言語行動のみを指すものなのか，英語文化において，「スピーチのはじめにはジョークを交える」というような「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」までをも含んでいるのかが不明瞭だからである。もし後者であるならば，「わきまえ」という，日本語に固有なものであるかのような印象を与えかねない言葉をわざわざ導入する必要はなく，どの文化・社会にも当てはまる概念として，「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」という，より一般的な言葉を使用するべきである。一方，もし，日本文化の特徴，日本的価値観を反映した言語行動，ポライトネス行動の特徴をうまく表している概念として「わきまえ」を用いるのであるならば，「わきまえ」という概念は，少なくとも，ポライトネスの「普遍理論」構築のための「鍵概念」としては，使えないことになるからである。以上のような理由から，本稿で言う「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」，「話者個人の方略的な言語使用」は，井出の言う「わきまえ方式の言語使用」，「働きかけ方式の言語使用」とは，捉え方が異なるものである。

ここでは，個々の論文はあげないが，「わきまえ」，或いは，その訳語としてのdiscernmentという用語を引用している論文の中には，Brown & Levinsonの理論の鍵である「方略的言語使用（strategic language use）」に対立するものとして「敬語使用」を捉え，「わきまえ（discernment）」を「敬語使用の原則を守ること」とほぼ同義に用いているものが多い。しかし，「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」を，「敬語法を守る」或いは，「敬語法に制約される」言語行動ということだけに矮小化して捉える捉え方には問題があるということを，ここで強調しておきたい。

筆者は，「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」をより広義に捉えており，「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用（language use that conforms to sociolinguistic norms and conventions）」と「方略的言語使用（strategic language use）」とは，排他的なものではなく，どの言語・文化においても共存しているものであると捉えている。そして，ポライトネスは，日本語などの敬語を有する言語においても，英語などの敬語を有さない言語においても，この「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」の2側面から，またそれらの「相互作用」という観点から，談話レベ

ルで捉える必要があると考えている。また，「話者個人の方略的言語使用」とは，敬語使用の原則を無視して，個人の好みで言葉遣いを変えるというようなことではなく，敬語使用の原則を守りながらも，時々，常体にダウンシフトしたり，冗談を交えたり，あいづちを大げさに打って，あなたの話をよく聞いていますよ，ということをアピールしたりするというような言語行動も含む。つまり，日本語においても，敬語使用だけにとらわれないで，実際の言語使用を見てみると，よく観察される言語行動（談話レベルから捉えられるものが多い）を含むものとして捉えている。そういう意味で，Ide（1989）の言うように，「日本語には，『話者個人の方略的な言語使用』の余地がほとんどない」とは捉えない。むしろ，文レベルにおいて敬語使用の原則の制約を強く受けざるを得ない敬語を有する言語だからこそ，なおさら，談話レベルの要素に「話者個人の方略的な言語使用」が顕著に反映されると捉えるのである。

13）トマス著，浅羽監修（1998：205）より，2次引用しておく。

「…レヴィンソン（1979：368）は，活動の型を次のように定義している。

…[活動の型] とは，境界のはっきりしないカテゴリーであり，その主たる構成要素は活動の目的によって定義され，社会的に構成され，制約されている。言いかえれば参加者や状況など，とりわけ許されている寄与の種類について，制約を持つ事象のことである。典型的な例としては，教育現場，就職のための面接，法廷尋問，フットボールの試合，ワークショップの活動，ディナー・パーティーなど。」

14）Brown & Levinsonのポライトネス理論の枠組みでは，「心理的距離」の捉え方は，明確にされていない。未だ検討の必要がある部分である。

引用文献

＜邦文＞

井出祥子，荻野綱男，川崎晶子，生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動ー大学生の場合ー』，南雲堂.

宇佐美まゆみ（1993a）「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジーー話者間の力関係による相違ー日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』，第21号，25-39．日本コミュニケーション学会.

---------- （1993b）「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」，学苑 647，37-47．昭和女子大学近代文化研究所.

---------- （1993c）「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」，ことば，14号，20-29．現代日本語研究会.

---------- （1994a）「言語行動における“politeness”の日米比較」，スピーチ・コミュニケーション教育，30-41．日本コミュニケーション学会.

---------- （1994b）「場面に応じた「ね」の使い分け」『職場における女性の話しことば』，51-60．東京女性財団1993年度助成研究報告書.

宇佐美まゆみ（1994c）「性差か力（power）の差か：初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」『ことば』，15号，53-69．現代日本語研究会.

---------- （1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」，学苑 第662号，27-42．昭和女子大学近代文化研究所.

---------- （1996）「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」『ことば』，17号，44-57．現代日本語研究会.

---------- （1997a）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究（C）研究成果報告書．（URL：http://japanese.human.metro-u.ac.jp/kokubun/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html）

---------- （1997b）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば：職場編』現代日本語研究会編，241-268．ひつじ書房.

---------- （1998a）『初対面二者間72会話資料（年齢・性別統制）：エクセル版』，私家版.

---------- （1998b）「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」『ヒューマン・コミュニケーション研究』49-61，日本コミュニケーション学会.

---------- （1998c）「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報1997度版』，東京外国語大学日本課程編，147-161.

---------- （1999a）「談話の定量的分析ー言語社会心理学的アプローチーー」『日本語学』第18巻10号（10月号），40-56．明治書院.

---------- （2001）「『ディスコース・ポライトネス』という観点から見た敬語使用の機能：敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」『語学研究所論集』，第6号，1-29．東京外国語大学語学研究所.

荻野綱男（1980）「敬語における丁寧さの数量化」『国語学』第120集.

小柳麻由子（2000）「二者間会話における距離を縮めるストラテジー」，東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.

Olivieri, Claudia（1999）「イタリア人学習者の日本語におけるスピーチレベルシフト」，東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.

柏崎秀子（1995）「談話レベルで捉える丁寧さー談話展開が丁寧度評定に与える影響」『日本文化研究所紀要』第1号，61-73．亜細亜大学日本文化研究所.

金珍娥（2000）「ディスコース・ポライトネスの日韓対照研究ースピーチレベルとスピーチレベルシフトの機能に関する考察ー」，東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.

謝　オン（2000）「依頼行為の日中対照研究」，東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.

杉戸清樹（1983）「待遇表現としての言語行動ー「注釈」という視点ー」，『日本語学』第2巻第7号，32-42．明治書院.

---------- （1993）「敬語」『国文学』第38巻第12号，38-42.

---------- （1998）「「メタ言語行動表現」の機能ー対人性のメカニズムー」『日本語学ー複雑化社会のコミュニケーションー』第17巻第11号（9月臨時増刊号），168-177．明治書院.

西尾純二（1998）「マイナス待遇表現行動分析の試み—非礼場面における言語行動規範につい

て一」『日本学報』17，57-69．大阪大学．

<英文>

Blum-Kulka, S. (1990). You don't touch lettuce with your fingers: Parental politeness in family discourse. *Journal of Pragmatics, 14 (2)*, 259-288.

Blum-Kulka, S. (1997). *Dinner talk : Cultural patterns of sociability and socialization in family discourse.* Mahwah: Lawrence Erlbaum, Associates.

Brown, P. and Levinson, S. (1978). Universals in language usage: politeness phenomena. In Esther N. Goody. ed. *Questions and politeness.* 56-311. Cambridge University Press.

Brown,P and Levinson,S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

Brown, R. (1990). Politeness theory: Exemplar and exemplary. In I. Rock (Ed), *The Legacy of Solomon Asch: Essays in cognition and social psychology.* Hillsdale: Lawrence Erlbaum, Associates.

Brown, R. and Gilman, A. (1960). The pronoun of power and solidarity. In T.A. Sebeok (Ed.), *Style in Language.* 253-276. Cambridge: M.I.T. Press and John Wiley & Sons, Inc.

Fraser, B. (1978). Acquiring social competence in a second language. *RELC Journal*, 9 (2), 1-26.

Fraser, B. (1990). Perspective on politeness. *Journal of Pragmatics, 1*, 219-236.

Fraser, B. (1999). Comments in question time after his keynote speech. International Symposium on Linguistic Politeness: Theoretical Approaches and Intercultural Perspectives (ISLP99). December 7-9, 1999. Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.

Green, G. (1992). The universality of Gricean accounts of politeness. Lecture at the 1st Conference of Pragmatics Association of Japan. Tokyo.

Ide, S. (1982). Japanese sociolinguistics: politeness and women's language. *Lingua 57*, 357-385.

Ide,S. (1989). Formal forms and discerment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua 8*, 223-248.

Ide,S., Hill, B., Carnes,Y.M., Ogino, T.,and Kawasaki, A. (1992). The concept of politeness: an empirical study of American English and Japanese. In Watts, R.J et al.(eds.) *Politeness in language: studies in its history, theory and practice.* Berlin:Mouton de Gruyter.

Kasper, G. (1990). Linguistic politeness: Current research issues. *Journal of Pragmatics, 14* (2), 193 -218.

Lakoff, R. (1973). The logic of politeness: or minding your p's and Q's. *Chicago Linguistic Society, 9.* 292-305.

Leech,G. (1983). *Principles of pragmatics.* New York:Longman. リーチ（1987），『語用論』池上・河上訳，紀伊国屋書店．

Leech,G. (1992). Context: a necessary but impossible construct. Paper presented at The British Council Applied Linguistics conference. Tokyo.

Levinson, S.C. (1983). *Pragmatics.* Cambridge University Press. レヴィンソン（1990），『英語語用論』，安井・奥田訳，研究社出版．

Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics 12*, 403-426.

Maynard, S. K. (1993). *Discourse modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language.* Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Thomas, J. (1995). *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics.* London; New York: Longman.（トマス（1998），浅羽亮一監修，田中他訳『語用論入門』，研究社出版）

Usami, M (1993). Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people: Influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics, Amsterdam, Netherlands.

Usami, M. (1994). Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese. Unpublished qualifying paper. Harvard University.

Usami, M. (1996). Discourse politeness in Japanese conversation: From the results of speech-level shifts and topic management strategies. Paper presented in special sessions: Round table "Culture-specific behaviors and language teaching: Across disciplinary discussions," at the 11th World Congress of Applied Linguistics, Jyvaskyla, Finland.

Usami, M. (1999a). Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Unpublished doctoral dissertation. Harvard University.

Usami, M. (1999b). On the notion of "Discourse Politeness": Based on the analyses of Japanese conversations. Paper presented at the International Symposium on Linguistic Politeness: Theoretical Approaches and Intercultural Perspectives (ISLP99). December 7-9, 1999. Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.

Usami, M. (2000a). Topic management strategy in "Discourse Politeness." Paper presented at the SIETAR Europe 10th annual congress, March 15-18, 2000. Brussels, Belgium.

Usami, M. (2000b). Honorific use as a stylistic marker and speech-level shift as a discourse politeness strategy. Paper presented at the Sociolinguistics Symposium 2000, April 27-29, 2000, Bristol, England.

Usami, M. (2000c). Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness. Poster presented at the 7th International Pragmatics Association conference, July 9-14, 2000, Budapest, Hungary.

Usami, M. (2000d). Functions of honorifics and topic management in "Discourse Politeness" as unmarked politeness: From the analyses of Japanese conversations.

Poster presented at the 10th annual meeting of the society for text and discourse. July 19-21, 2000. Lyon, France.

Walle, L. Van de and K. Van de Poel. (1993). Where East meets West and the classical world meets contemporary society: politeness as appropriate behavior. Paper presented at the 4th International Pragmatics Conference. Kobe, Japan.

Yule, G. (1996). *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.